

平安京左京八条四坊二町跡・塩小路若山城跡

2023年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

平安京左京八条四坊二町跡・塩小路若山城跡

2023年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

本文目次

I 調査の概要	1
1. 調査にいたる経緯と経過	1
2. 立地と歴史的環境	2
II 遺構	5
1. 基本層序	5
2. 遺構	8
III 遺物	26
IV まとめ	38
報告書抄録	

挿図目次

図1 調査位置図 (1:5,000)	1
図2 調査区配置図 (1:800)	2
図3 調査前風景 (南東から)	2
図4 作業風景 (南西から)	2
図5 現地説明会のようす (南西から)	2
図6 基本層序 模式図	5
図7 南・北壁面 断面図 (1:100)	6
図8 東・西壁面 断面図 (1:100)	7
図9 1区 古墳時代の自然堆積層の分布状況 (1:150)	9
図10 1区 平安時代の遺構 平面図 (1:150)	10
図11 SE180 平・断面・見通し図 (1:40)	11
図12 1区 平安時代末から鎌倉時代の遺構 平面図 (1:150)	12
図13 建物1 平・断面図 (1:50)	13
図14 SE265 平・断面図 (1:40)	14
図15 SE156 平・断面及び見通し図 (1:40)	15
図16 SK150 平・断面図 (1:40)	16
図17 1区 鎌倉時代の遺構 平面図 (1:150)	17
図18 SE266 平・断面図 (1:40)	18
図19 SK38 平・断面図 (1:40)	19

図20	SE109 平・断面図 (1:40)	20
図21	1区 室町時代から江戸時代の遺構 平面図 (1:150)	21
図22	SK140 断面図 (1:40)	22
図23	SK2 平・断面図 (1:40)	22
図24	SE108 平・断面図 (1:40)	23
図25	SD1 平・断面図 (1:40)	24
図26	2区 東・南壁断面図及び平面図	25
図27	出土遺物 実測図1 (1:4)	26
図28	出土遺物 実測図2 (1:4)	27
図29	出土遺物 実測図3 (1:4)	28
図30	出土遺物 実測図4 (1:4)	29
図31	出土遺物 実測図5 (1:4)	30
図32	出土遺物 実測図6 (1:4)	32
図33	出土遺物 実測図7 (1:4)	33
図34	出土遺物 実測図8 (1:4)	34
図35	出土遺物 実測図9 (1:4)	35
図36	出土遺物 実測図10 (1:4)	37
図37	出土輸入陶磁器の時期・器種別割合	37
図38	平安京左京八条四坊一・二町跡内の発掘調査成果 (中世後期から江戸時代) (1:1000)	39
図39	江戸時代の東塩小路村の屋敷配置図 (伊藤 1988 を基に作成)	41

表 目 次

表1	周辺の調査	3・4
表2	遺構概要表	8
表3	遺物概要表	26

図 版 目 次

図版1	遺構
	1 SD1 全景 (南から)
図版2	遺構
	1 調査地から京都タワーをのぞむ (東から)

- 2 1区第3面 井戸検出状況（北から）

図版3 遺物

- 1 出土鑄造関係遺物

図版4 遺構

- 1 1区第3面 全景および自然堆積層の分布（画面下が北）
- 2 1区 自然堆積層の堆積状況（攪乱断面 東から）

図版5 遺構

- 1 1区第3面 全景（北西から）
- 2 SE180 遺物出土状況（南から）

図版6 遺構

- 1 SE180 断面（東から）
- 2 SE180 下段井戸検出状況（東から）

図版7 遺構

- 1 SE180 井戸枠検出状況（東から）
- 2 SE180 井戸枠取り上げ状況
- 3 SE180 井戸枠の木組み

図版8 遺構

- 1 SE180・SE265 検出状況（南東から）
- 2 SE265 井戸枠内完掘状況（南から）

図版9 遺構

- 1 SE265 上部断面（南から）
- 2 SE265 掘方断面（南から）
- 3 SE265 井戸枠近接

図版10 遺構

- 1 1区第2面 全景（北西から）
- 2 SE156・SE266 切り合い状況

図版11 遺構

- 1 SE156 掘方断面（西から）
- 2 SE156 井戸枠検出状況（南から）
- 3 SE156 井戸枠近接（西から）

図版12 遺構

- 1 SK150 断面（南から）
- 2 SK150 底部炭検出状況（南から）

図版13 遺構

- 1 SK150 掘削中の石出土状況（南から）

- 2 SK150 角柱痕跡 (南西から)
- 3 SK140 断面 (南東から)

図版 14 遺構

- 1 SE266 井戸枠内断面 (東から)
- 2 SE266 掘方断面 (東から)

図版 15 遺構

- 1 SE266 内枠掘方 断面 (東から)
- 2 SE266 掘方断面 南 (東から)
- 3 SE266 掘方断面 北 (東から)

図版 16 遺構

- 1 1区第2面 全景西半 (北から)

図版 17 遺構

- 1 SE109 井戸枠検出状況 (南東から)
- 2 SE109 断面 (東から)

図版 18 遺構

- 1 SK2 断面 (東から)
- 2 SK2 石検出状況 (東から)

図版 19 遺構

- 1 1区第1面 検出状況 (南から)
- 2 1区第1面 全景 (画面下が北)

図版 20 遺構

- 1 SD1Aと1B・Cの切り合い (北から)

図版 21 遺構

- 1 SD1 断面 (北から)
- 2 2区第2面 全景 (北西から)

図版 22 遺物

自然堆積窪み・第1面掘り下げ・SE180・SE265 出土遺物

図版 23 遺物

SE265・SE200・SE144・SK150 出土遺物

図版 24 遺物

SK150・SE266・SE109・SE109 桶内 出土遺物

図版 25 遺物

SE109 桶内・SK140・SD1 出土遺物

I 調査の概要

1. 調査にいたる経緯と経過

本調査は、商業施設建設に伴う発掘調査である。調査地は京都市下京区東洞院通七条下る東塩小路町556番10に位置し(図1)、平安京左京八条四坊二町跡ならびに中世城館と推定される塩小路若山城跡に該当する。

株式会社グランディアは当該地において商業施設建設を計画し、令和4年3月1日付けで文化財保護法93条第1項に基づく届出をおこなった。これを受けて京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「文化財保護課」)は令和4年3月7・8日に試掘調査を実施し、この結果、敷地の西側では各時代の遺構面が良好に残っていることを確認したため、計画建物範囲西側について発掘調査を指導した(図2)。

発掘調査は令和4年5月17日～7月16日にかけて実施し、2箇所の調査区を設けた。調査は、まず1区から重機で現代盛土および現代耕作土を除去し、以下を人力で掘削した。随時写真・図面などの記録を取りながら掘り下げ、3面の遺構面を調査した。また令和4年6月18日には現地説明会を開催した。2区は遺構の分布を確認することを目的として設けた調査区で、1区の調査成果をうけて1区第1面に相当する高さまで重機掘削し、以下を人力で掘り下げた。こちらは遺構が希薄であったため2面を調査した。面積は合計260㎡である。

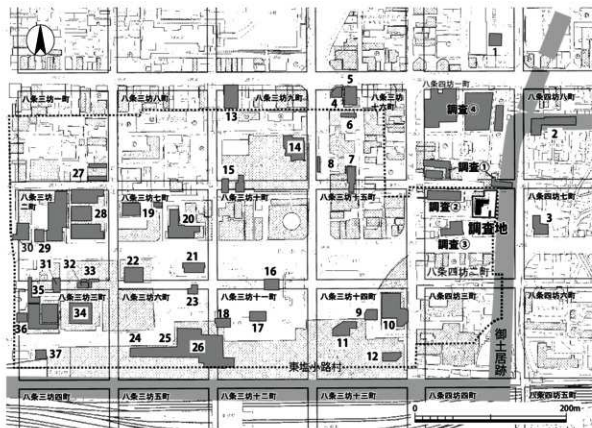


図1 調査位置図 (1:5000)

2. 立地と歴史的環境

調査地は京都駅の北東地域にあたる。南北は七条通と塩小路通の間、東西は高倉通と東洞院通の間に位置し、平安京跡の南東部に該当する。周辺の調査成果や街路の乱れから、高倉通よりも東側は広義の鴨川流域であったことがわかっており、豊臣秀吉が京都市街地を囲った御土居の南部東辺に隣接していることから、河川との境界域に立地していることが推測された。

平安京跡では左京八条四坊二町跡に該当する。二町の西を限る東洞院大路は後世に竹田街道と呼ばれた鳥羽離宮へと続く重要な街路であり、調査地を含む二町は、平安時代後期には鳥羽天皇の皇女である八条院の所領であったという。

続く中世は東寺曼荼羅院領を経て、中世後期には若山氏の領地となった。若山氏は室町時代後期に当該地周辺を再開発した土豪で、江戸時代には東塩小路村の庄屋を務めた。村は都市近郊の農村であるが洛中にあり、現在の京都駅北側、当該地から西洞院通までの広い範囲を村域としていた。この前身こそが、若山氏が室町時代に開発した土地であり¹⁾、当該地周辺は若山氏の居城跡とされる塩小路若山城跡が包蔵地として指定されている。ただし、これまでの調査では塩小路若山城跡に関する遺構は確認されていなかった。

1) 「若山家文書」(高橋一男氏所蔵)永正十五年九月二十一日『史料 京都の歴史 第12巻 下京区』京都市

3. 周辺の調査成果(図1)

周辺では広い範囲で調査がおこなわれている。近隣でも4件の発掘調査がおこなわれており、平安時代から中世にかけて複数の遺構面が検出されている。

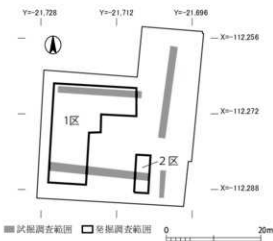


図2 調査区配置図(1:800)



図3 調査前風景(南東から)



図4 作業風景(南西から)



図5 現地説明会のようす(南西から)

調査① 調査区の北隣接地で2001年に行われた調査で、平安時代から江戸時代までの遺構面を検出した。この調査地は正安3年(1301)に左京八条四坊一町に創建されたと伝わる時宗寺院「金光寺」に比定されており、「金光寺」関係の遺構や14世紀代の遺構を多数確認した。

調査② 調査区の西隣接地で2017年に行われた調査で、平安時代から江戸時代までの各遺構面4面を調査した。最も遺構数が多かったのは平安時代後期から鎌倉時代の面で井戸や柱穴など1000基を超える遺構を確認した。

調査③ 南側で2008年に行われた調査で、黄褐色泥砂層の上面で主に平安時代から江戸時代の遺構を確認した。平安時代前期の井戸を検出したほか、主に14世紀代と近世の遺構が検出された。ただし下層は砂礫層で遺構は検出されなかった。

調査④ 調査地の北側、七条通沿いで2015・2018年に行われた調査で、平安時代前期の建物や鎌倉時代の埋裏が複数並んでいる状況を検出したほか、室町時代の地業ほか多数の遺跡を確認した。とくに室町時代の地業は金光寺に関する御堂跡だと推定された。

調査①『平安京跡発掘調査報告』左京八条四坊一町 関西文化財調査会2004

調査②『平安京左京八条四坊二町・堀小路若山城跡』古代文化調査会2018

調査③『平安京左京八条四坊二町・堀小路若山城跡 発掘調査終了報告』関西文化財調査会2008

調査④『平安京左京八条四坊一町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-13

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2019

立地が京都駅周辺ということもあり、他にも多くの地点で発掘調査が行われている(表1)。

表1 周辺の調査

No	条坊・遺跡	報告書
1	七条四坊四町	『平安京左京七条四坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-6(財)京都市埋蔵文化財研究所2008
2	八条四坊八町・御土居	『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-11(財)京都市埋蔵文化財研究所2014
3	八条四坊八町	『平安京左京八条四坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2003-11(財)京都市埋蔵文化財研究所2014
4	八条三坊十六町・七条大路	『平安京左京八条三坊1』『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1994
5	八条三坊十六町・七条大路	『平安京左京八条三坊2』『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1994
6	八条三坊十六町	『平安京左京八条三坊』『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1989
7	八条三坊十六町・堀小路	『平安京左京八条三坊十五・十六町』古代文化調査会2005
8	八条三坊十六町	『No.74』『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1982
9	八条三坊十四町	『左京八条三坊十・十一・十四町』『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所2011
10	八条三坊十四町	『平安京左京八条三坊2』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1999
11	八条三坊十四町	『No.69』『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1982

12	八条三坊十四町	『平安京左京八条三坊2』『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
13	八条三坊九町・七条大路	『平安京左京八条三坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010.6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010
14	八条三坊九町	『平安京左京八条三坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009.12 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009
15	八条三坊九町・十町・塩小路	『平安京左京八条三坊九・十町・七条町の調査』古代文化調査会 2007
16	八条三坊十町・十一町・八条坊門小路	『左京八条三坊十・十一・十四町』『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011
17	八条三坊十一町	『左京八条三坊十・十一・十四町』『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011
18	八条三坊十一町・室町小路	『左京八条三坊十・十一・十四町』『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011
19	八条三坊七町	『平安京左京八条三坊七町』(財)京都文化財団 1988
20	八条三坊七町	『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1982
21	八条三坊七町	『平安京左京八条三坊1』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
22	八条三坊七町・八条坊門小路	『平安京左京八条三坊』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
23	八条三坊六町・八条坊門小路	『平安京左京八条三坊1』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
24	八条三坊六町	『左京八条三坊』『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984
25	八条三坊六町	『平安京左京八条三坊』『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
26	八条三坊六町・十一町・室町小路	『平安京左京八条三坊2』『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
27	八条三坊二町・西洞院大路	『平安京左京八条三坊一町』『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011
28	八条三坊二町	『平安京左京八条三坊二町』(財)古代学協会 1985
29	八条三坊二町	『平安京左京八条三坊二町一第2次調査』(財)古代学協会 1985
30	八条三坊二町・西洞院大路	『平安京左京八条三坊二町2』『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011
31	八条三坊二町	『平安京左京八条三坊二町1』『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011
32	八条三坊二町・八条坊門小路	『平安京左京八条三坊二町』『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2012
33	八条三坊二町・八条坊門小路	『平安京左京八条三坊二町』『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2008
34	八条三坊三町	『平安京左京八条三坊1』『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
35	八条三坊三町	『平安京左京八条三坊1』『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
36	八条三坊三町・八条坊門小路	『平安京左京八条三坊2』『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
37	八条三坊三町	『平安京左京八条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005.10 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005

Ⅱ 遺 構

1. 基本層序 (図6～8)

本調査地の地層は基本的に砂質であった。これは土地の基盤が広義の鴨川河川敷に伴う砂帯であることや、度重なる氾濫によってある程度標高が高くなって安定した後も、洪水砂が供給される立地であったことによる。

東壁でみる基本層序は、現代盛土以下、GL-0.6 mで近現代耕作土、-0.8 m～-0.9 mで黒褐色砂泥、-0.9～-1.0 mでの黄灰色泥砂からなる整地層もしくは黄褐色砂礫 (第1面)、-1.1 mで黄灰色細砂ブロック混じる粗砂の整地層もしくはにぶい黄褐色粗砂～礫 (第2面)、-1.2 mで暗灰黄色泥砂の整地層もしくは水成堆積層である暗灰黄色細砂～粗砂・にぶい黄褐色粗砂～礫であった。整地層を除くGL-1.1 m以下は水成堆積を示すラミナが観察される砂礫層で、鴨川との位置関係から南東側が厚く、つまり標高の高い位置まで砂礫が堆積している状況を確認した。

詳細は後述するが平安京遷都以前の当該地は鳥状の砂帯と窪地が分布する扇状地の一部であったようで、調査区北西部は窪地にあっており、部分的に整地層を検出した。第2面として上面で検出をおこなった灰黄色砂礫は調査地の南部に分布する砂礫層であるが、ラミナなどの自然堆積時の痕跡は観察されなかった。第2面の北部は整地層が分布しており、整地を含む人間の活動によって堆積層が攪拌された影響と考える。なお、整地土の質の違いは下位の堆積状況による。

平安京遷都以前の当該地は広義の鴨川河川敷であり、調査区の南部および東部ではGL-1.1 m以下水成堆積の砂礫層であった。それに対し調査区の北西部は、砂州の間にてできる窪地にあたり、部分的な整地層を確認したほか、GL-1.4 m以下では暗青灰色シルト～細砂

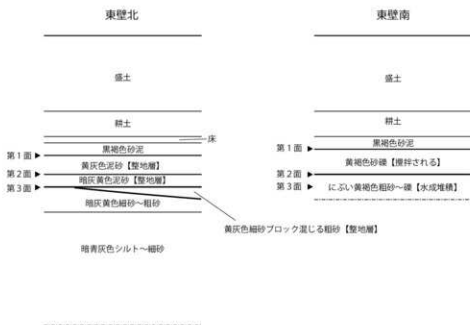


図6 基本層序 模式図 (1:30)

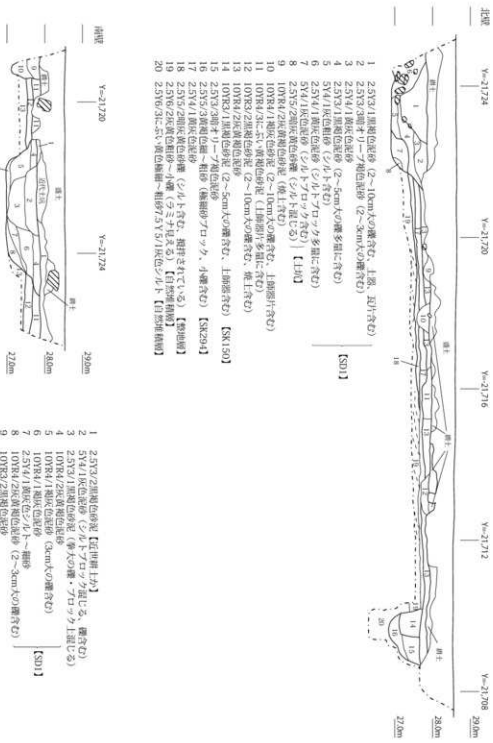
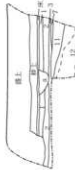


図7 南・北限断面図 (1:100)

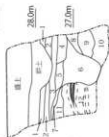
北郷区東郷

X=112,274



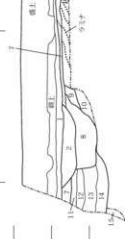
北郷区南郷

Y=21,716

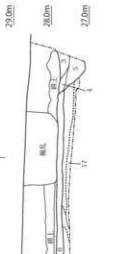


東郷

X=112,276



X=112,284



- 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥【新世粘土分】
- 2 2.5Y4/1黄灰色泥砂 (5~10m次の礫多量に含む)
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 (シルト・ブロック含む、土師器片含む)
- 4 2.5Y3/2黒褐色泥砂 (5cm次の礫を含む)
- 5 2.5Y4/1灰色泥砂 (1cm次の礫を含む)
- 6 2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 7 2.5Y5/1黒褐色砂泥、10Y R5/6黄褐色粗砂・ブロック混じる
- 8 2.5Y3/1オリーブ黒褐色シルト・粗砂
- 9 7.5Y3/1オリーブ黒褐色泥砂 (5~10cm次の礫を含む)
- 10 5B6/4/1暗青灰色シルト→中部のブロック土
- 11 2.5Y5/2灰黄色粗砂→粗砂
- 12 (上) 7.5Y5/2灰オリーブ粗砂→細砂

- 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 2 10YR3/1黒褐色泥砂 (5~10cm次の礫・細砂・ブロック含む)
- 3 10YR3/2黒褐色泥砂
- 4 10YR4/3に、黄褐色粗砂
- 5 10YR4/1暗灰色泥砂 (2~3cm次の礫を含む)
- 6 10YR5/3に、黄褐色粗砂
- 7 2.5Y4/1黄灰色泥砂 (5~10cm次の礫多量に含む)
- 8 10YR3/1黒褐色泥砂 (5~10cm次の礫を含む)
- 9 2.5Y3/2黒褐色泥砂 (5~10cm次の礫を含む)
- 10 2.5Y3/1黒褐色泥砂

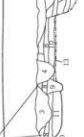
- 11 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 (シルト・ブロック含む、土師器片含む)
- 12 2.5Y3/2黒褐色泥砂 (5cm次の礫を含む)
- 13 2.5Y3/1オリーブ黒褐色泥砂 (粗砂・ブロック含む)
- 14 7.5Y3/1オリーブ黒褐色泥砂 (粗砂・ブロック含む)
- 15 5B6/4/1暗青灰色シルト→中部のブロック土
- 16 10YR3/3に、黄褐色粗砂→3cm次の礫【自然傾斜層】
- 17 10YR3/3に、黄褐色粗砂→3cm次の礫【自然傾斜層】

西郷

X=112,284



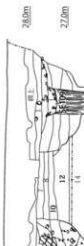
X=112,280



X=112,276



X=112,268



- 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 (灰・土師器片含む)
- 2 2.5Y3/2黒褐色泥砂 (5~10cm次の礫多量に含む)
- 3 2.5Y3/1黒褐色泥砂 (2~5cm次の礫含む)
- 4 2.5Y3/1黒褐色泥砂
- 5 2.5Y3/1黒褐色泥砂
- 6 2.5Y4/1黄灰色泥砂
- 7 2.5Y3/1黒褐色泥砂

- 8 10YR4/3に、黄褐色泥砂 (2~3cm次の礫を含む)
- 9 2.5Y4/1黄灰色泥砂
- 10 2.5Y4/1黄灰色泥砂 (5~10cm次の礫多量に含む)
- 11 2.5Y3/2黒褐色泥砂
- 12 10YR5/2B黄褐色粗砂 (礫多量に混じる)【影無層】
- 13 10YR5/2K黄褐色泥砂
- 14 10B6/4/1暗青灰色シルト→粗砂



図8 東・西郷面 断面図 (1:100)

2. 遺構

1区

今回の調査では、整地層上面および自然堆積の砂礫層上面で3面の遺構面を検出し、平安時代から江戸時代までの遺構を調査した。主な遺構の時期は、平安時代前期、平安時代末から鎌倉時代、室町時代後期から江戸時代である。

包含層を含む出土遺物の年代観にはある程度まとまりがあり空白期もあることから、当該地には、連続的に人が住み続けたというよりは複数の活期があったと考えられそうである。また砂礫層の堆積状況および断面観察から平安時代以前の地形についても所見を得た。以下時代の古い順に整理し報告する。

平安時代以前 (図9)

ラミナが観察される砂礫層の堆積から、平安時代以前の当該地は河川敷であったことがわかった。今回検出した最も古い遺構は平安時代前期の井戸であり、窪地を部分的に埋めた平安時代前期の整地層を検出したことから当該地の開発は平安時代になってから行われたと考えられる。最終段階の自然の堆積層には古墳時代～飛鳥時代の遺物が少量含まれていた。

窪地は当該地が鴨川流域の扇状地であった時に形成されたもので、砂礫とシルトの平面分布および壁面観察によれば、平安時代以前の調査地は鳥状の砂帯とその陰になってできる窪地が点在するような地形の一部であったと推測される²⁾。

2) 株式会社パレオ・ラボ 辻康男氏にご教示いただいた。

平安時代前期 (図10)

平安時代の遺構は第3面で検出した。井戸SE180と小穴がある。同面で検出した他の井戸については遺物の検討から鎌倉時代の遺構であるため後述する。第3面で検出した小穴は出土遺物が少なく時期不詳のため当面で図示した。

SE180(図11、図版5～7) 調査区の中央北側で検出した井戸である。南北2.7m東西2.3mの楕円形の掘方中央部に3重の方形井戸枠が据えられていた。一番外側は短冊状の板を並べて横棧で止めたもので一辺約1.0m、検出した深さ(長さ)は0.6mであった。断面観察ではこの側板の外側下部にさらに薄板が設置されていた。側板の幅は約11～13cm、厚さ約1cmで1辺に8～9枚を使用する。横棧は幅約10cm、厚さ2～3cmであった。中枠は角柱と横板で構成されており、1辺0.9

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	井戸 SE180	
鎌倉時代	建物1、井戸 SE265・156・144・266・109、 土坑墓 SK150・38、柱穴、小穴	
室町～江戸時代	井戸 SE108、土坑 140、溝 SD1	

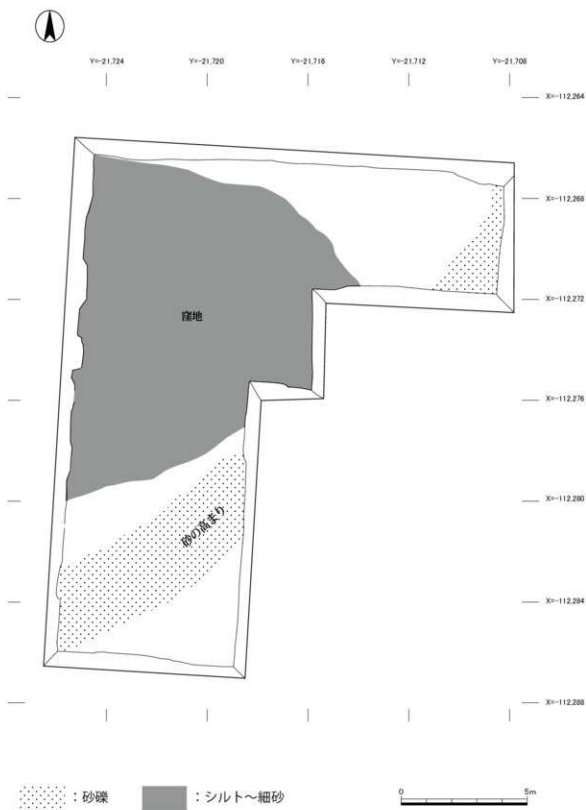


図9 1区 古墳時代の自然堆積層の分布状況（1：150）

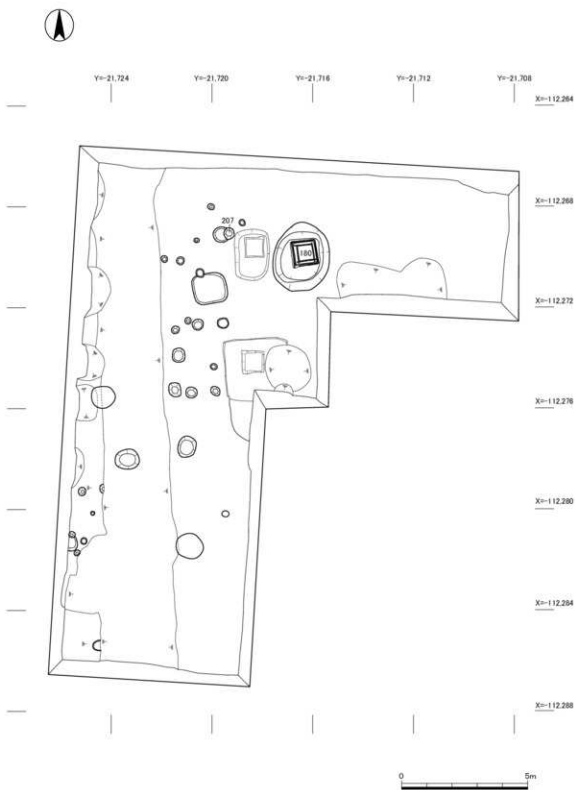


图10 1区 平安時代の遺構 平面図(1:150)

m高さ0.3mある。四隅の角柱は6cm角で高さ30cm、横板は幅6センチ厚さ3～4cmであった。最も内側の枠は井桁に組まれており1辺は約0.7m深さ0.5mである。板材は長さ80cm、幅13cm、厚さ3cmで5段が遺存していた。井戸底では井戸枠の下端に接するように3～10cm大の礫を多数検出した。自然堆積の砂礫層を掘り込んでいるため沈下防止の可能性がある。

井戸枠内の埋土は大きく2層にわかれ上層は灰色泥砂と灰色シルト～細砂からなる外枠埋土、下層はオリブ褐色・暗灰黄色の砂礫からなる内枠埋土である。層7の灰色シルト～粘土は使用時の埋土と推測される。層8は内枠の据付時の埋土で暗灰色砂礫である。最上層には多数の遺物を含む

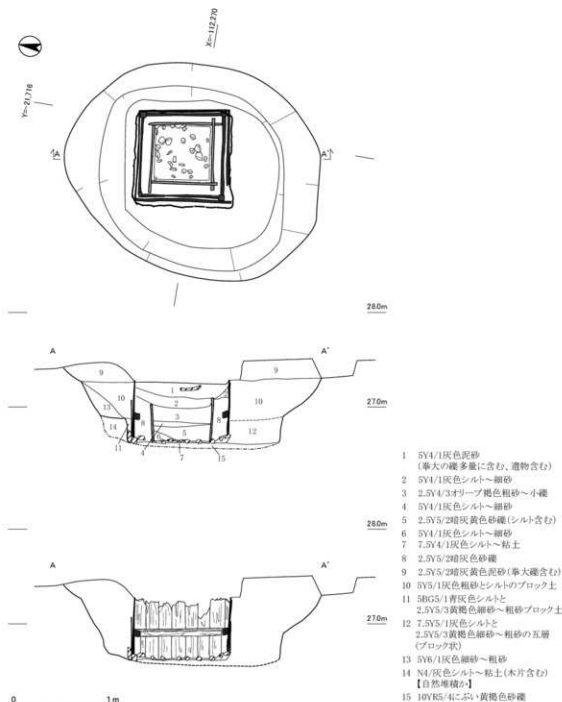


図11 SE180 平・断面図(1:40)

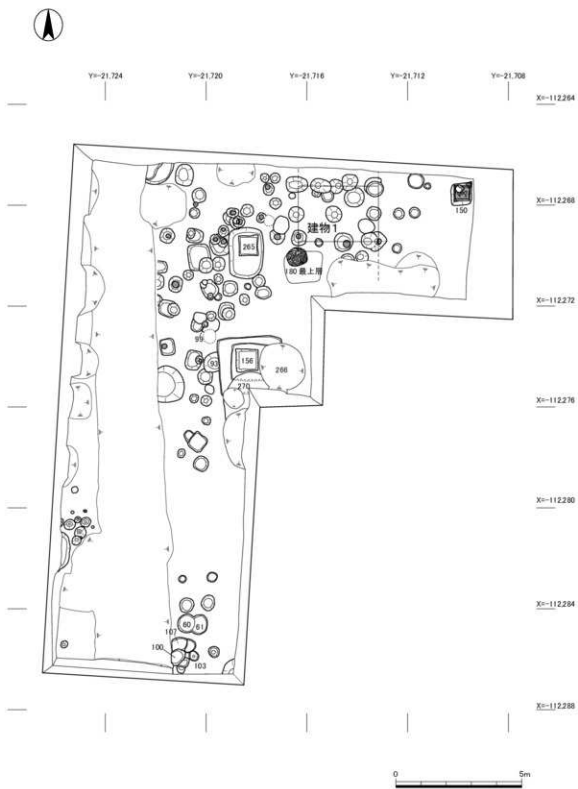


図12 1区 平安時代末から鎌倉時代の遺構 平面図 (1:150)

み、灰釉陶器壺や黒色土器鉢など2A段階の遺物が出土した。

掘方の地層は大きく三層にわかれ上層(層9)は暗灰黄色泥砂、中層(層10)は灰色粗砂とシルトブロックが混ざった土、下層(層11~13)は灰色シルトと砂の互層あるいは細砂~粗砂であった。掘方からは良好な状態の遺物が出土しなかったが廃絶が9世紀後半であることから平安時代前期の井戸であると考えられる。

SP207 調査区の北側で検出した小穴で直径0.4m、深さ0.2m、埋土は黒褐色泥砂であった。灰釉陶器椀が出土した。

平安時代の遺構としては他に多数小穴検出した。調査区中央部に多く、SE180よりも西側に建物が発見する可能性があるが、今回調査では明確な建物跡は確認できなかった。

平安時代末から鎌倉時代(図12)

鎌倉時代の遺構は主に第1・2面の東側で検出した。また第3面でも上層で検出しきれなかつ

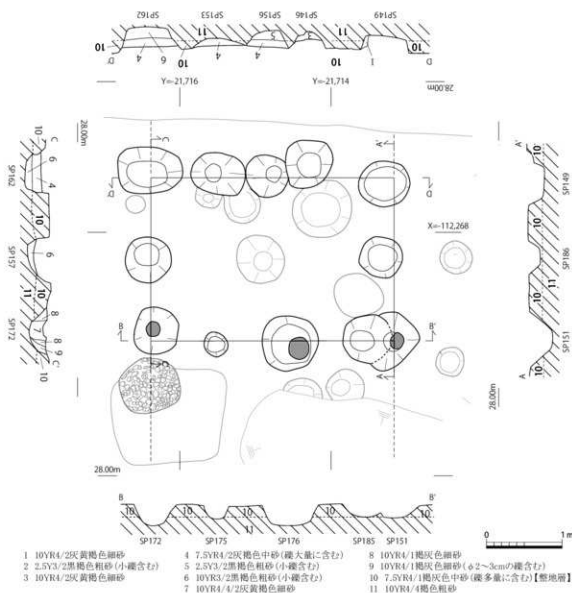


図13 建物1 平・断面図(1:50)

た鎌倉時代の遺構を検出した。第3面の遺構は層位の検討から本来は第1・2面で成立した遺構が多く、遺物から遺構の時期が判明したものについては鎌倉時代の遺構として報告する。

第2面で検出した遺構は主に平安時代末～鎌倉時代、第1面で検出した遺構は主に鎌倉時代である。なお2面の遺構は時期差が僅かであり一面にまとめて報告することが可能だが、遺構の重複により煩瑣になるため便宜上2面に分けて報告する。

平安時代末期から鎌倉時代の遺構

第2面の南部および東部は下位の砂礫層が高くなっており、その高まりに合うように部分的な整地層が検出された。このため遺構は砂礫および整地層の上面で検出した。

建物1及び方形の井戸SE156、SE265や墓SK150のほか土師器皿を多数含む土坑SP100などと多数の小穴・柱穴が確認された。

建物1 (図13) 調査区の北側で検出した建物跡で東西3.5m南北2.5mである。桁行3間、梁間2間で柱間は約1.2mであった。ただし調査区外へ展開しもう少し大きな建物の可能性もある。柱穴は直径約0.4～0.6mで深さは約0.2mであった。

SE265(図14、図版8・9) 調査区の中央北寄りで検出した井戸である。南北2m、東西1.4m、深さ1.3mの長方形の掘方をもち、その北側で方形木枠を検出した。この方形井戸枠の底中央で直径約0.5mの小穴を検出した。木製品は遺存していなかったものの痕跡から曲物の内枠があったと推測される。

遺存していた井戸枠は縦板の横棧組で1辺約0.8m、深さは1.0mである。枠板材は1辺3枚(遺存状態が悪くできるだけ大きな単位を観察した。6枚の可能性もある)幅24cm、厚さ0.5cmの板を使用している。遺存していた横棧は下段のみであったが、痕跡から2段の棧があったと推測される。下段横棧は幅4cm、厚さ8cmであった。掘方土は大きく2層に分かれる。下層は緑灰色細砂～粗砂からなる層10、灰色シルトの層11とそれを切る層9・12からなる。層9・10の関係から、ある程度埋め戻した後に井戸枠を据えたと推測

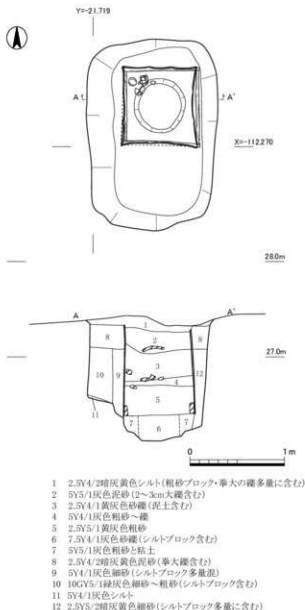
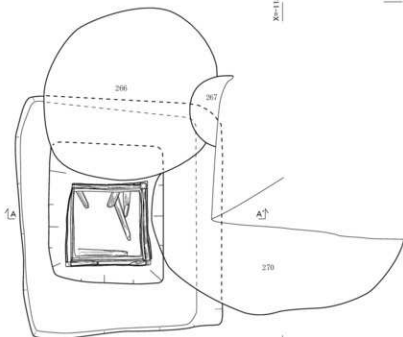


図14 SE265 平・断面図 (1:40)

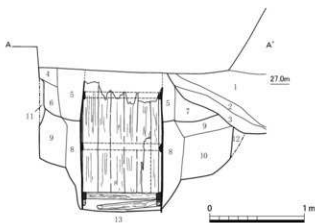


X=112,278



Y=21,220

28.0m



27.0m



- 1 7.5Y4/1灰色泥砂(粗砂・礫大の礫含む)
 - 2 10BG4/1暗青灰色細砂～粗砂
 - 3 5BG5/1青灰色極細砂～シルト
 - 4 10Y5/1灰色細砂～粗砂(極細砂ブロック多量に含む)
 - 5 7.5Y5/1灰色細砂～粗砂のブロック土(2cm～3cm大の礫含む)
 - 6 10BG5/1青灰色細砂～中砂のブロック土
 - 7 10BG4/1暗青灰色細砂～粗砂(礫大の礫含む)
 - 8 2.5Y5/2暗灰黄色細砂～粗砂のブロック土(シルトブロック多量に含む)
 - 9 5BG5/1青灰色細砂～粗砂のブロック土(シルトブロック含む)
 - 10 5BG5/1青灰色シルト～粗砂ブロックと10YR5/3に富み黄褐色中砂～粗砂ブロックの互層
 - 11 10Y5/1灰色シルト
 - 12 10YR5/4に富み黄褐色粗砂
 - 13 2.5Y5/3黄褐色砂礫
- 【SK270】
- 【SE156】

図15 SE156 平・断面及び見通し図(1:40)

される。これは掘方の周囲が全て砂の堆積層であるためかもしれない。断面観察では、下層である層9～12の上位に暗灰黄色泥砂からなる層8がある。井戸枠を据えた後の埋土と考えられる。井戸枠内の地層は6つに分かれ、灰色粗砂と粘土からなる層7は曲物を据えた埋土、層6は曲物痕跡を含む内枠の埋土である。井戸枠内埋土は泥砂あるいは粗砂からなり4層にわかれた。層1は暗灰黄色シルトからなり廃絶後の凹みを埋めた土である。なお、第1面で検出したSK10、11は検討の結果SE265の最上層であった。遺物は、6A段階の土師器が出土した。12世紀第4四半期～13世紀初頭の遺構と考えられる。

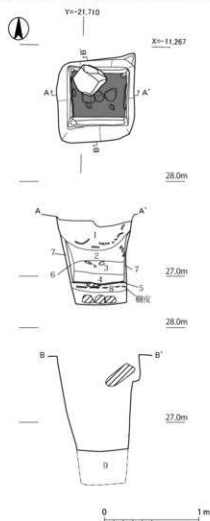
SE156（図15、図版10・11）調査区の中央で検出した井戸である。東辺をSE266、南辺をSK270に切られている。1辺約2.5mの方形掘方の中央に方形の井戸枠を検出した。深さは1.75mである。井戸枠は四隅に柱を建て、縦板を横棧で留めた木枠である。1辺0.9m長さ1.3mを確認した。四隅の柱材は1辺5cmの角材、薄板は1辺6～8枚、幅10～12cm、厚さ1cmである。横棧は遺存状態が悪く部分的に確認できたのみだが3段を確認した。幅4cm厚さ5cmである。

掘方埋土は大きく2層に分かれる。下段は青灰色シルト～粗砂ブロックとにぶい黄褐色中砂～粗砂の互層からなる層10および細砂～粗砂のブロック土からなる層9を層8（暗灰黄色細砂～粗砂ブロック土）が切っている。上段は青色細砂～中砂のブロック土からなる層6、暗青灰色細砂～粗砂からなる層7を層5（灰色細砂～粗砂ブロック土）が切っている。これらの観察からある程度埋めた後に井戸枠を据えたと推測される。井戸枠内は2～5cm大の礫を多量に含む暗灰黄色泥砂で埋められている。埋土からは13世紀代の遺物が出土した。

SK270 調査区の中央で検出した土坑である。SE156を切っており、東半はSE266に壊されている。南北1.8m東西1.6m以上深さは0.7mである。埋土は上層が灰色泥砂、下層は暗青灰色の細砂～粗砂と青灰色極細砂～シルトである。土師器皿、須恵器鉢、瓦器火鉢、青磁椀などが出土した。13世紀代の遺構と考えられる。

SK150（図16、図版12・13）

調査区の東端で検出した土坑で墓の可能性はある。南北0.9m東西0.8mの方形で深さは0.9mである。内側に



- 1 10YR2/3黒褐色泥砂
- 2 7.5YR3/1黒褐色泥砂(土師器小片含む)
- 3 10YR2/2黒褐色泥砂(土師器小片含む)
- 4 10YR2/1黒色泥砂(灰・土師器小片・骨小片混じる)
- 5 5Y2/1黒色泥
- 6 7.5YR2/1黒色細砂、同色細砂混じる
- 7 2.5Y3/1黒色中砂
- 8 7.5Y6/1灰色細砂～粗砂
- 9 5Y4/1灰色砂礫(シルト含む)【SK294】

図16 SK150 平・断面図(1:40)

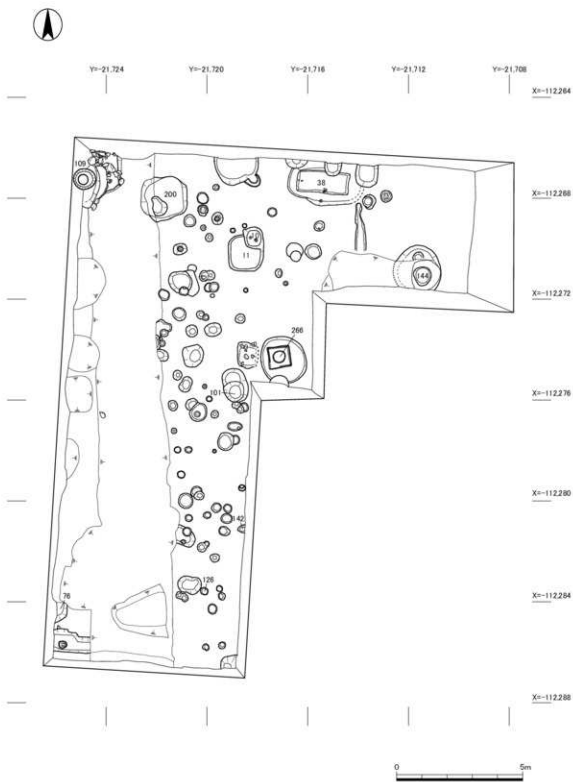


図17 1区 鎌倉時代の遺構 平面図(1:150)

木枠痕跡を確認した。枠は1辺0.6mの方形で、四隅には直径約5cmの杭状痕跡が残っていた。木部の遺存状況は悪く部分的に痕跡が残っていたのみであったが、土層断面から側板があったと推測される。木枠の底は深さ0.7mである。底には一面に炭が堆積していた。掘方埋土は灰色細砂～粗砂からなる。枠内の埋土は大きく2層に分かれ、下層はさらに3層に細分される。上層(層1)は黒褐色泥砂からなり、土師器皿、瓦器鍋、人頭大の石などを含む。このほか埋土から複数の釘が出土した。炭層(層5)を除去すると部分的に拳大の礫が置かれている状況を検出した。6B段階の土師器皿が出土した。13世紀前半の遺構と考えられる。

SK294 SK150の最下層(層9)は北壁の土層を検討した結果別の土坑であった。SK150に切られている。壁面で検出した径は1.2mである。

SP60・61 調査区の南側で検出した小穴でSP60が61を切っている。SP60は直径0.7m、深さ0.2m、SP61は直径0.7m深さ0.2mであった。60・61とも埋土は暗灰黄色泥砂であった。SP60・61からは12世紀後半の遺物が出土した。

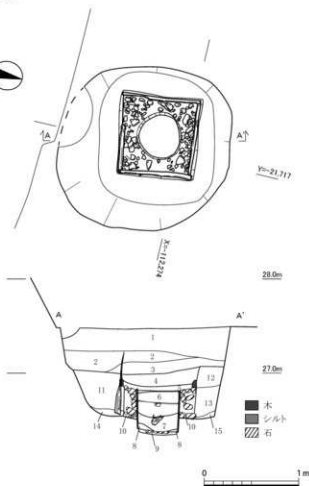
SP93 調査区の中央部で検出した小穴で一辺約0.6mの隅丸方形を呈している。深さは0.3mで埋土は黒褐色泥砂であった。中国産の緑釉陶器小杯が出土した。

SP99 調査区の中央北側で検出した小穴で直径0.2m深さ0.2m埋土は黒褐色泥砂であった。

SP100 調査区の南端で検出した小穴で直径0.5mの不定な円形をしており、西端をSD01に切られている。深さは0.2mで埋土は灰黄褐色泥砂である。5B6A段階の土師器皿が出土した。

SP103 調査区の南端で検出した小穴で直径0.3m深さ0.2mであった。埋土は暗灰黄色泥砂であった。

SP107 調査区の南端で検出した小穴で直径0.5mの不定な円形をしており、西端をSD01に切られている。深さは0.3mで埋土は灰黄褐色泥砂であった。5B6A段階の土師器皿が出土した。



- 1 10YR4/1 暗灰色 泥砂
- 2 5Y4/1 灰色 泥砂(10cm大礫、粗砂ブロック含む)
- 3 5Y4/1 灰色 泥砂(粗砂ブロック、小礫含む)
- 4 7.5Y4/1 灰色 泥砂(10cm大礫含む)
- 5 5B3/1 暗青灰色 泥砂
- 6 5Y5/1 灰色粗砂と7.5Y4/1シルト互層
- 7 5G4/1 暗緑灰色シルト～粗砂(10cm大礫、木片、細砂ブロック含む)
- 8 2.5Y5/3 黄褐色 粗砂
- 9 2.5Y5/2 暗灰黄色 粗砂(礫)
- 10 2.5Y4/1 黄灰色 細砂(5～20cm大礫多量に含む)
- 11 5B4/1 暗青灰色 細砂(シルトブロック、小礫含む)
- 12 5V4/1 灰色細砂(粗砂ブロック含む)
- 13 5B3/1 暗青灰色 細～中砂
- 14 2.5Y5/2 暗灰黄色 粗砂(細砂ブロック含む)
- 15 5B4/1 暗青灰色 極細砂

図18 SE266 平・断面図(1:40)

鎌倉時代の遺構 (図17)

おもに第一面として検出したにぶい黄褐色砂礫からなる整地層の上面で検出した遺構及び、第2・3面で検出した遺構のうち遺物から鎌倉時代であることがわかった遺構を報告する。井戸2基(SE144・266)、土坑(SK200)、土坑墓(SK38)、柱穴・小穴がある。おおむね6A～7A段階の遺構である。このほか、鎌倉時代の遺構にはやや時期が離れた7C段階の井戸SE109がある。

SE144 調査区の東端で検出した土坑で掘方は直径約1.4mの円形である。木枠は検出されなかったが底部中央で直径0.8mの円形掘り込みを検出したため木枠があったと推測される。検出面からの深さは1.2mである。埋土は5～10cm大の礫を多量に含む黒褐色泥砂からなる。

SE266 (図18、図版14・15) 調査区の中央で検出した井戸である。SE156を切っている。直径1.8mの円形で、深さ1.1mである。掘方中央に方形木枠の外枠と桶組の内枠が配されている。外枠は側板横棧留めである。側板の遺存状況はよくなかったが厚さ約1cm長さ60cmが残っていた。横棧は幅約4cm厚さ6センチである。内枠は桶組で直径0.5m長さ0.4mである。クレは厚さ約1cmでタガは無かった。掘方埋土は暗青灰色細砂からなる層11などブロック土を含む砂である。外枠と内枠の間を埋める埋土には拳大の礫が多量に含まれる。桶底でも礫が多量に検出された。廃絶後の層は3層に分かれる。

SK200 調査区の北西端で検出した土坑で西側をSD01に切られている。一辺約2.5mの方形、深さは約1.0mある。埋土は10YR3/2黒褐色泥砂であった。井戸枠は検出されなかったが井戸の可能性もある。埋土から鏡の鋳型が出土した。

SK38 (図19) 調査区の北側で検出した土坑で、土坑墓の可能性がある。東西2.5m以上、南北1.5m以上の長方形で、上部は耕作で削平されており、残存していた深さは0.1mである。掘方中央に東西2.1m南北0.9mの長方形土坑を検出した。埋土は褐灰色泥砂である。検出時に土師器皿がまとまって出土した。土器のほかに釘・鎌なども出土した。

SK76 調査区の南側西壁際で検出した土坑で北半は攪乱に切られている。南北0.7m以上、東西0.5m以上あり西半は西壁側に延びる。深さ0.4mで埋土は暗灰黄色泥砂であった。

SP101 調査区の中央で検出した小穴で一辺0.8mの隅丸方形、深さは0.3mであった。埋土は暗灰黄色泥砂であった。

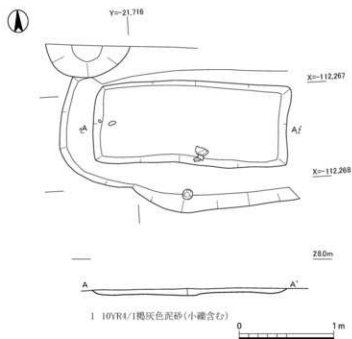
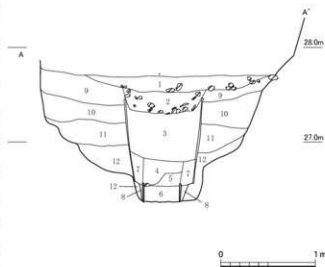
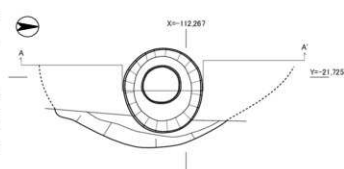


図19 SK38 平・断面図 (1:40)

SP126 調査区の南側で検出した小穴で直径0.2m深さ0.2mであった。埋土は暗灰黄色泥砂であった。

SP142 調査区の南側東壁際で検出した小穴で東西0.3m以上南北0.2m、深さ0.2m、埋土は黒褐色泥砂であった。東播系須恵器鉢が出土した。

SE109(図20、図版17) 調査区の北西端で検出した井戸である。直径約2.5m、壁面で確認した深さは1.5mであった。西側半分は調査区外にのびている。中央部では桶組の井戸枠及び曲物を検出した。桶枠は直径0.8m残存長さ0.8mである。曲物は遺存状態が悪く、木片および痕跡が確認されたのみである。曲物の直径は約0.4m残存長さ0.2mであるが、断面観察から本来はもう一段上にも曲物があつたと推測され、その場合は深さ0.4mある。井戸枠内埋土は大きく2層に分かれる。上層(層1)は黄灰色泥砂からなる埋土で、下層(層3~6)は曲物据え付け時の地層および曲物内埋土である。掘方は4層(層5~8)廃絶後の埋土は4層(層1・2)に分かれた。



- 1 2.SV4/2暗灰黄色泥砂
- 2 2.SV4/1黄灰色泥砂(特大の礫含む)
- 3 2.SV4/1黄灰色泥砂(小礫含む)
- 4 2.SV3/2黒褐色泥砂
- 5 2.SV4/2暗灰黄色砂礫(シルト含む)
- 6 2.SV6/1暗灰黄色砂礫(シルト含む)
- 7 2.SV4/1黄灰色泥砂
- 8 SV3/1灰色砂礫
- 9 2.SV5/2暗灰黄色泥砂(小礫多量に含む)
- 10 SV3/1オリブ黒色細砂~シルト(粗砂ブロック多量に含む)
- 11 N4/灰色細砂~シルト
- 12 N4/灰色シルトと2.SV5/3黄褐色砂礫の互層

図20 SE109 平・断面図(1:40)

鎌倉時代末期から江戸時代(図21)

鎌倉時代末より新しい遺構は調査区の西側に集中していた。江戸時代の溝SD1は東塩小路村の東境界にあたる区画溝であるが、最も古くは室町時代まで遡る可能性があり、SD1を境とした東と西では遺構の時代や分布が異なる結果となった。

SK140 調査区の西端中央で検出した土坑である。遺構の大方は調査区外にあり東西0.7mを検出した。西壁で確認した掘方の直径は1.7mで深さは1.4mである。半分以上が調査区外のため井戸枠は検出できなかったが、竹管が刺さっていたことから、井戸であると推定する。

埋土は大きく2層に分かれる。上層は暗灰黄色砂泥からなり、廃絶後の埋土と考えられる。下層は掘方(層6~8)と埋土(層2~5)に分かれる。層6は黄灰色砂泥、層7は暗灰色粘質土、層8は暗灰色シルト~細砂である。埋土は層2が黄灰色泥砂、層3が灰色砂泥、層4が灰色砂泥、

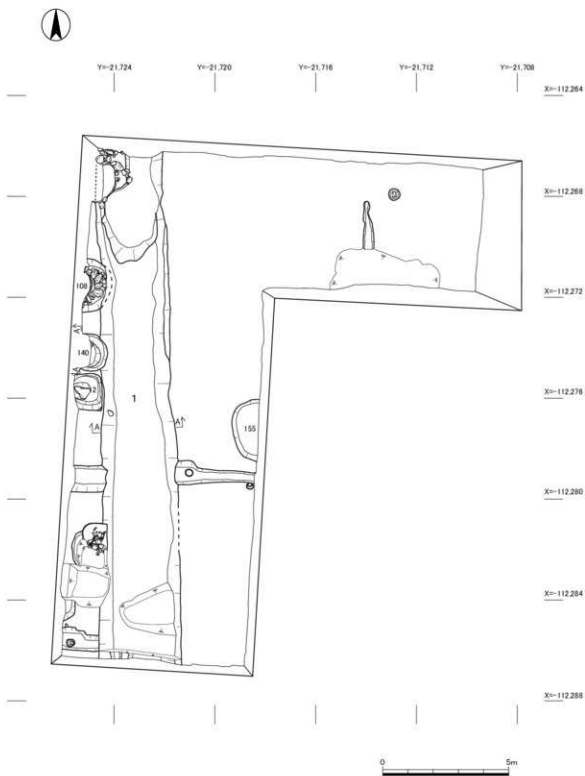


図21 1区 室町時代から江戸時代の遺構 平面図（1：150）

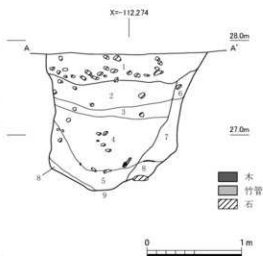
層5は暗青灰色シルト～中砂であった。

SP2 (図23、図版18) 調査区の西端中央で検出した柱穴である。南北1.4m、東西1.2m以上、深さ1.1mで、西壁方向に延びていく。根石は南北0.4m東西0.6m厚さ0.2m以上あり、かなり規模の大きな柱穴といえる。埋土は大きく3層にわかれる。下層(層9)は根石を据え付けた土で灰色シルトからなる。中層は柱据え付け時および柱跡に溜った土で、層5～8は据え付け時の埋土で層2・3は抜き取り後埋土、層4は柱跡と考えられる。上層は廃絶後の埋土で黄灰色砂泥からなる。

SK155 調査区の東側で検出した土坑である。南北2.5m以上、東西1.0m以上、東半は調査区外に延びていく。深さは1.0mである。埋土は三層に分かれる。遺物は細片のみで図化できなかったが、土師器ほか瀬戸美濃焼の黄瀬戸皿などが出土した。安土桃山から江戸時代の遺構と考えられる。

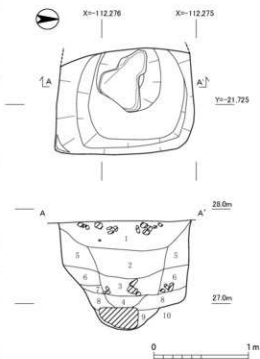
SE108 (図24) 調査区の西端で検出した石組みの井戸である。南北2.0m、西半分が調査区外にのびる。井戸枠は石組みで直径約1.5mの円形を呈している。石材は人頭大で確認できた範囲では三段組まれていた。下部は木枠であった。遺存状態が悪いが桶枠と推定される。西壁で確認できた地層は大きく3層に分かれる。層7～11は掘方の埋土である。層8は壁面が斜めになっているため見えている桶の裏側の埋土である。層4は桶枠内の埋土で灰色泥砂からなる。層1・2は廃絶後の埋土で層2には拳大の礫が多量に含まれていた。

SD1 (図25、図版1・20・21) 調査区の中央西寄り検出した溝である。調査区の南北にのびる。検出幅は約3m、深さは0.7～0.9mで、検出長は約20mである。やや北で、西に振っている。少なくとも2度の掘り直しが認められたため、A・B・Cに分けて報告する。



- 1 2.5V5/2暗灰色砂泥
- 2 2.5V4/1黄灰色泥砂
- 3 10V4/1灰色砂泥
- 4 N4/ 灰色砂泥(1～5cm大の礫多量を含む)
- 5 SB3/1暗青灰色シルト～中砂(ブロック土含む)
- 6 2.5V4/1黄灰色砂泥
- 7 N3/ 暗灰色粘質土
- 8 N3/ 暗灰色シルト～細砂
- 9 5V4/1灰色シルト～中砂(鉄分沈着)

図22 SK140 断面図(1:40)



- 1 2.5V4/1黄灰色砂泥(拳大礫含む)
- 2 2.5V3/1黒褐色泥砂(小礫・土師器片含む)
- 3 2.5V3/1黒褐色砂泥(拳大礫含む)
- 4 N3/ 暗灰色砂泥(木片含む)【柱あたり】
- 5 2.5V4/2暗灰色砂泥
- 6 2.5V3/2黒褐色泥砂(小礫含む)
- 7 7.5V4/1灰色砂泥
- 8 N3/ 暗灰色細砂
- 9 7.5V4/1灰色シルト
- 10 SB5/1青灰色細砂(シルト帯状に含む)

図23 SP2 平・断面図(1:40)

SD1C：最下層の溝で第2面検出時に底部を部分的に検出した。埋土は灰色シルト～粗砂である。江戸時代の初頭まで機能していたA・B埋土と完全に掘り分けられなかったため遺物は一括して報告するが、室町時代後期の遺物が含まれていたことから、この頃には掘削されていた可能性もある。

SD1B：幅3m、深さ0.7～0.9mある溝で、機能時堆積層と埋土を1Aに切られている。埋土は大きく2層に分かれる。上層は暗灰黄色砂泥からなる人為的埋土、下層は黒褐色シルト～粗砂でラミナが観察された。下層から水が滲水していた時期があったと推測される。17世紀前半の遺物が出土した。

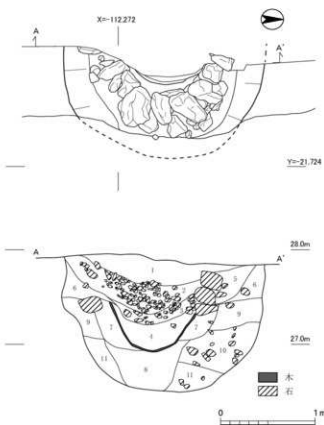
SD1A：最終段階の溝で幅約1.4m深さ0.7～0.9mである。SD1Bを埋めた後に幅を減じて掘りなおされている。埋土は上層が暗灰黄色泥砂、下層が黒褐色粗砂である。17世紀前半の遺物が出土した。

2区 (図2・26)

調査地の東側については試掘調査で遺構が希薄であることがわかっていて、南東部については前面道路が江戸時代の道を踏襲していることも考えあわせて、遺構の分布を確認するための調査区(2区)を設けた。

2区の基本層序は現代盛土以下、現代耕土・床土、GL-0.7mで灰黄褐色砂礫、GL-0.8mでラミナが観察される黄褐色粗砂～礫である。GL-0.8m以下は河川堆積層の砂礫であることを確認した。遺構面としては灰黄褐色砂礫(2区東壁層2)上面(第1面)と河川堆積層の砂礫上面の2面を調査したが、第1面で時期不明の小穴およびスキ溝を検出したのみであった。遺物も細片のみの出土であり、遺構・遺物ともに希薄であった。

この調査区の成果により、道の隣接地であっても東側については空閑地であったことが明らかとなった。



- 1 10YR4/2灰黄褐色泥砂
- 2 10YR5/2灰黄褐色泥砂(5～20cm大礫多量に含む)
- 3 2.5Y4/1黄灰色泥砂(5～10cm大礫含む)
- 4 10Y4/1灰色泥砂(5～10cm大礫含む)
- 5 10YR5/2灰黄褐色泥砂
- 6 10YR5/1褐色泥砂
- 7 7.5GY4/1暗緑灰色シルト～粗砂(細砂ブロック含む)
- 8 7.5GY4/1暗緑灰色細～粗砂(シルト、砂ブロック含む)
- 9 5GY4/1暗オリーブ灰色泥砂
- 10 7.5GY4/1暗緑灰色シルト～粗砂(細砂ブロック、5～20cm大礫含む)
- 11 10GY4/1暗緑灰色細～粗砂(シルトブロック含む)

図24 SE108 平・断面図(1:40)

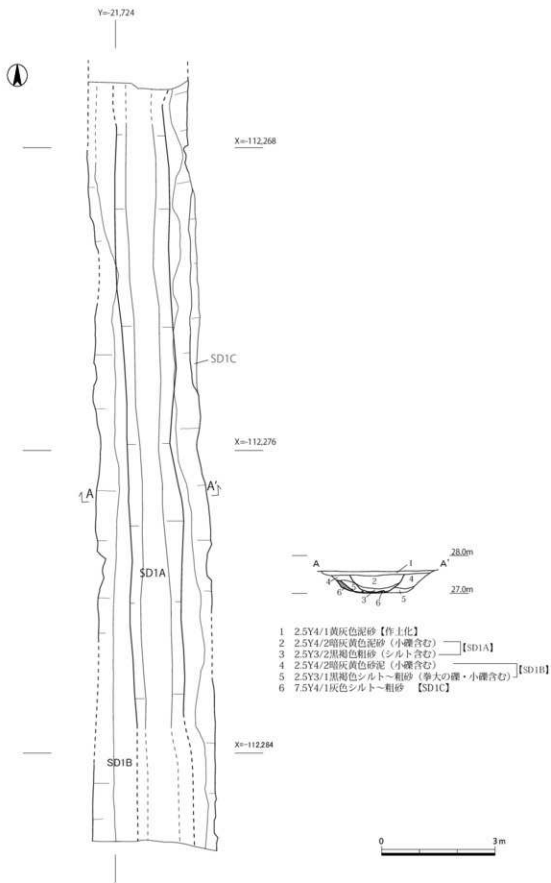
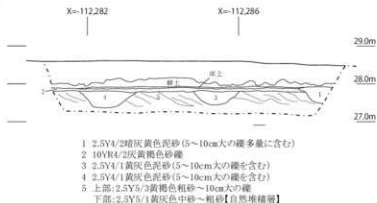


図25 SD1 平・断面図（1：100）

2区 東壁



2区 南壁



Y=21,706

X=112,280

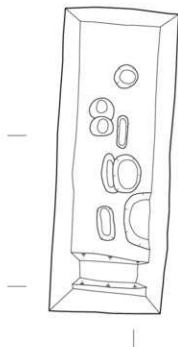


図26 2区 東・南壁 断面図および平面図(1:100)

Ⅲ 遺物

遺物の概要

今回の調査では整理コンテナ24箱の遺物が出土した。土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、土製品、石製品などがある。遺物の時期は、古墳時代合～飛鳥時代、平安時代前期、平安時代後期、鎌倉時代、室町時代、江戸時代等各時期のものがあるが、連続的ではなくいくつかのピークが見えるような出土状況であった。最も遺物量が多いのは土師器皿編年の6段階で、概ね鎌倉時代前半に位置付けられる。

平安時代以前から平安時代

自然堆積の窪みや包含層中から古墳時代～飛鳥時代、平安時代前期・中期に位置付けられる遺物が出土した。平安時代前期の遺物にはSE180出土遺物があるが、中期はほとんど出土がなく包含層中で土師器皿をわずかに確認したのみである。古墳時代の遺物は図9で示した自然堆積物の最上層やそれを母材とした各面の包含層からわずかに出土した。出土数が少ないが当該地の歴史を考える上で必要な遺物については図化し報告する。

自然堆積窪み出土遺物 1は古墳時代の須恵器杯蓋、2は飛鳥時代の須恵器杯である。

第1面掘り下げ出土遺物 第1面掘り下げ時に調査区の南側に分布するにぶい黄褐色砂礫（東

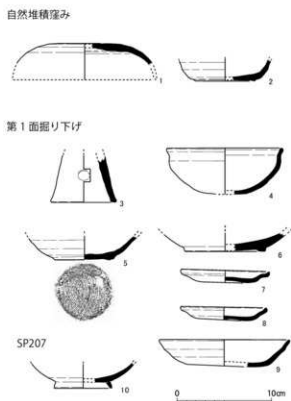


図27 出土遺物 実測図1(1:4)

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代 ～平安時代	古式土師器、土師器、須恵器 黒色土器、白色土器、 緑釉陶器、灰釉陶器、 瓦類		古式土師器1点、須恵器2点、 土師器10点、須恵器5点、 黒色土器2点、白色土器1点、 緑釉陶器1点、灰釉陶器3点、 軒平瓦1点、平瓦1点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、 白色土器、焼締陶器、 輸入陶磁器、瓦類、 金属製品、土製品、石製品		土師器160点、須恵器11点、 瓦器17点、白色土器2点、 焼締陶器3点、輸入陶磁器29点、 軒平瓦1点、平瓦1点、 金属製品12点、土製品6点、 石製品1点、焼土2点		
室町時代 ～江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、 染付、瓦類、金属製品		土師器12点、瓦器2点、磁器5点、 施釉陶器1点、焼締陶器1点 輸入陶磁器4点、土製品2点		
合計		24箱	299点(7箱)	1箱	16箱

SE180

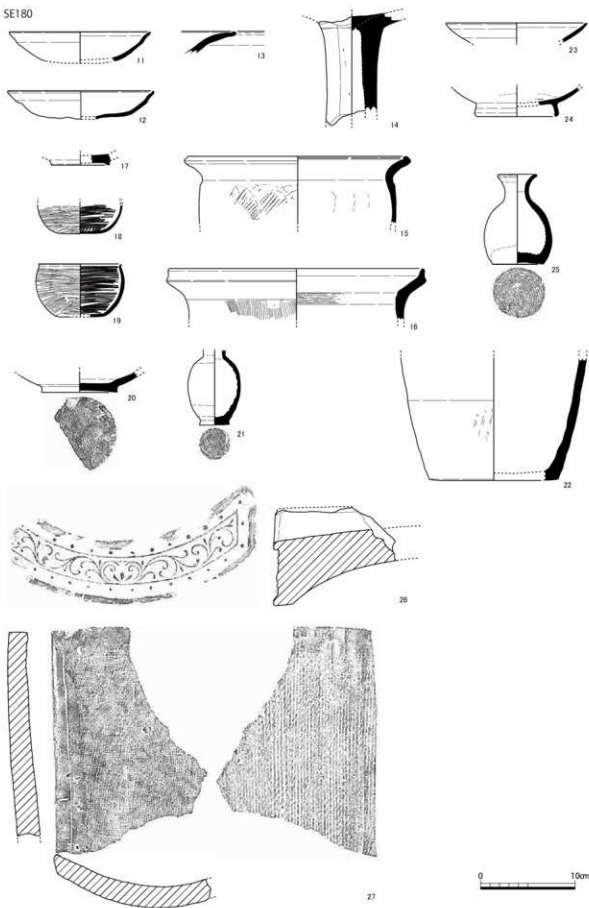


图28 出土遺物 実測図2 (1:4)

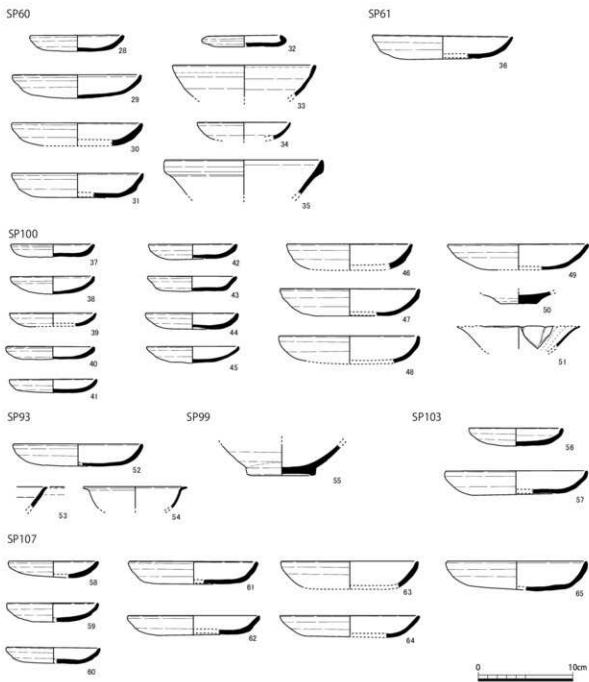


図29 出土遺物 実測図3 (1:4)

壁層 4a) から今回の調査地では比較的古い遺物が出土した。3は古式土師器高環の脚部である。かなり摩滅している。4は土師器甕である。5・6は須恵器の杯である。これらは9世紀代の遺物と考えられる。7～9は土師器皿で、7・8は皿A、9は皿Nである。10世紀代の遺物である。

SP207出土遺物 10は灰軸陶器碗である。高台は三日月高台で軸は刷毛塗である。

SE180出土遺物 土師器杯・高環・甕、白色土器、黒色土器甕、須恵器鉢・小壺・甕、緑軸陶器皿、灰軸陶器碗・壺、軒平瓦、平瓦ほか図化できなかったが土師器皿・丸瓦などが出土した。11～16は土師器である。11・12は杯、13・14は高環、15・16は甕である。17は細片のため器形

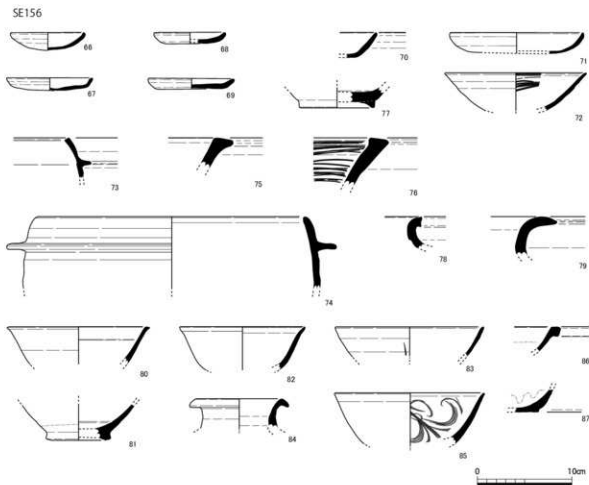


図30 出土遺物 実測図4 (1:4)

の詳細は不明だが白色土器の皿か椀の高台部である。18・19は黒色土器A類の小型甕で内外面に丁寧なミガキが施される。20～22は須恵器で、20は鉢底部、21は小壺、22は甕である。23は緑釉陶器の皿で京都産である。24・25は灰釉陶器である。24は椀で底部内面に重ね焼きの痕跡がある。釉は刷毛塗である。25は小壺である。26は均整唐草文軒平瓦である。西賀茂瓦窯NS207型式に該当する。27は平瓦である。これらの遺物は2A段階(西暦約840～870年、以下西暦約を省略)のものと考えられる。

今回調査では平安時代中期の遺物はほとんどみられなかった。平安時代前期の次は平安時代末の5B段階に属する遺物がややまとまって出土する。南端の小穴からの出土が多い。

平安時代末期以降

SP60出土遺物 土師器皿、須恵器椀、白磁椀・皿などが出土した。28～32は土師器皿である。28～31は皿Nで、28は口径10.1cm、29～31は口径13.7～14.0cmである。32は皿Acで口径9.0cmである。33は須恵器椀である。重ね焼きによって口縁部内外面の色調が濃くなっている。34・35は白磁である。34は皿、35は椀である。

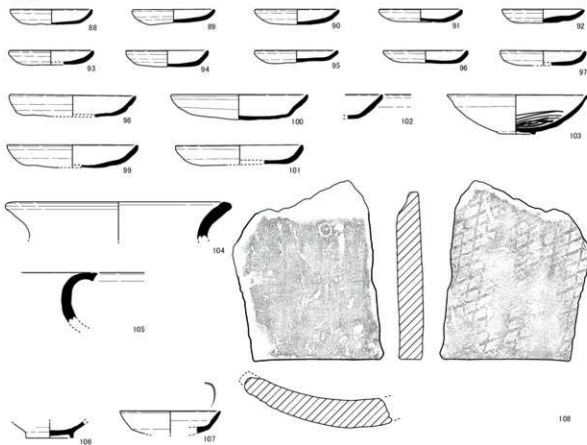
SP61出土遺物 36は土師器皿Nで口径14.9cmである。

SP100出土遺物 土師器皿、白色土器皿、青白磁片が出土した。37～49は土師器皿Nである。

37～45は小皿で口径8.9～9.9cm、46は口径13.4cm、47～49は口径14.9～15.0である。50は白色土器皿の底部、51は青白磁で細片だが口縁部が輪花になっている。内面の花卉部は堆線で表
現されている。小型の椀か皿であろう。5B段階（1140～1170年）に位置付けられる。

SP93・99・103・107出土遺物 52は土師器皿、53は白磁椀、54は中国産緑釉陶器の杯である。SP93から出土した。55は白磁椀Ⅳ類の底部でSP99から出土した。56・57は土師器皿Nであ

SE265



SE265 上層 (SK10・11)

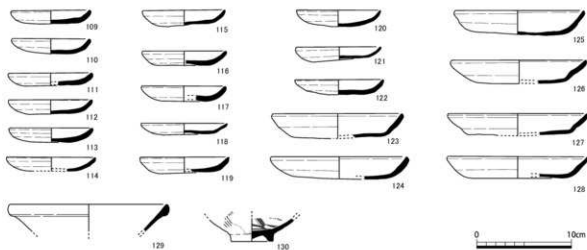


図31 出土遺物 実測図5 (1:4)

る。SP103から出土した。58～65は土師器皿Nで58～60は口径9.6～10.1cm、61～65は残存率が少なく復元口径はやや不安定であるが口径13.8～15.0cmである。SP107から出土した。これら小穴から出土した遺物は12世紀代のものと考えられる。

SE156出土遺物 土師器皿、須恵器鉢・甕、瓦器碗・羽釜・鍋・火鉢、山茶碗碗、焼締陶器壺、青磁皿、白磁碗・皿・壺、黄釉褐彩盤、褐釉壺などが出土した。

66～71は土師器皿Nである。66～69は口径8.0～9.2cm、71は口径14.3cmである。72～76は瓦器である。72は和泉型瓦器碗である。73・74は羽釜、75・76は火鉢である。77は山茶碗碗で、78は須恵器甕である。79は焼締陶器甕で常滑窯産である。80～84は白磁で80～83は碗、84は壺である。85は青磁碗で内面に劃花文が施されている。龍泉窯産である。86・87は黄釉褐彩盤である。

SE265出土遺物 土師器皿、須恵器鉢・甕・壺、瓦器碗・羽釜・鍋・火鉢・甕、焼締陶器甕、青磁皿、白磁碗・皿、褐陶陶器壺などが出土した。SE265は第3面で掘削した井戸であるが、埋土上層は第1面でSK10・11として掘削したため分けて報告する。

SE265 88～102は土師器皿である。88～97は口径8.7～9.2cm、98～101は口径13.5～14.5cmであった。103は和泉型瓦器碗である。104は須恵器の甕である。105は焼締陶器甕で常滑産である。106は白磁皿である。107は青磁皿で所謂同安窯系である。108は平瓦で凸面は格子タタキ、凹面に竹管印がある。12世紀末～13世紀前葉（6A新相から6B段階）の遺物と考えられる。

SE265上層 SK10・11として掘削したが、検討の結果SE265の埋土上層であることがわかったためSE265上層として報告する。109～128は土師器皿Nである。109～122は口径8.4～9.5cm、123～128は14.5～15.0cmである。129は白磁碗で大宰府分類の碗IV類である。130は青磁碗で所謂同安窯系、内面は片切彫りおよび櫛描文、外面に櫛描文がある。12世紀末～13世紀前葉（6A新相から6B段階）の遺物と考えられる。

SE144出土遺物 土師器皿、瓦器碗、白色土器碗、瓦器碗、焼締陶器甕、青磁・白磁・青白磁細片などが出土した。131～134は土師器皿Nで131は口径8.5cm、132は口径13.3cm、133・134は口径13.8cmと14.6cmであった。135は白色土器の碗である。136は瓦器碗で樟葉産。137は焼締陶器甕で常滑焼、底部には溶けた別個体の破片が溶着している。土師器皿の量が少ないため詳細な時期は不明だが13世紀中葉頃のものと考えられる。

SK76出土遺物 土師器皿138・139、白磁碗140が出土した。140は底部内面を釉刺ぎする。

SP101出土遺物 土師器皿、須恵器鉢、青磁碗などが出土した。141・142は土師器皿Nである。143は須恵器鉢である。144は青磁碗で内面に劃花文があり、龍泉窯産である。

SP126出土遺物 145は土師器皿Nである。146は須恵器碗で口縁部外面の色調が濃く変色している。東播磨産か。

SP142出土遺物 147は東播系須恵器鉢である。

SK200出土遺物 土師器皿、白色土器高環、焼締陶器甕、丸瓦、平瓦のほか、鏡の鑄型、石製品などが出土した。土師器皿は細片で図化できる資料がなかったが6段階のいずれかに属する。

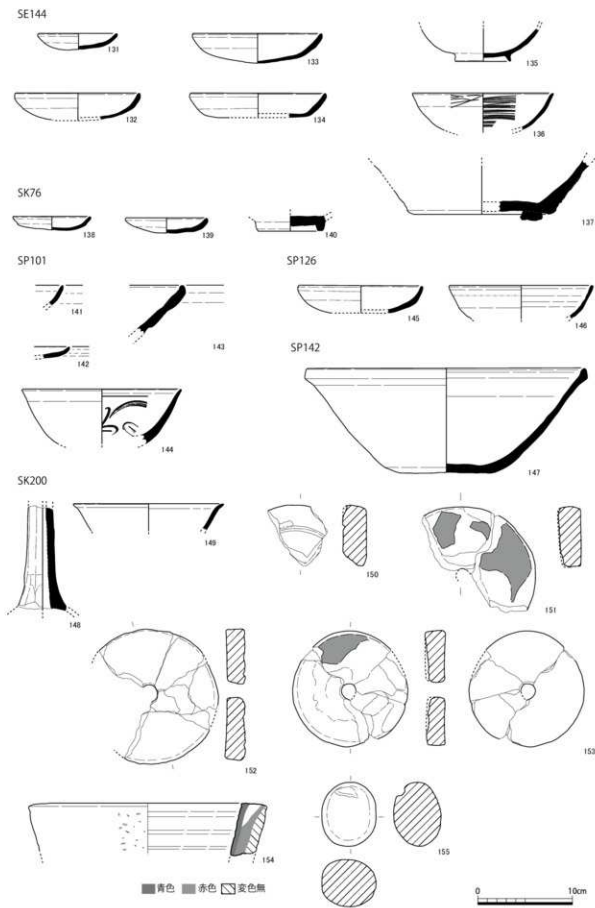
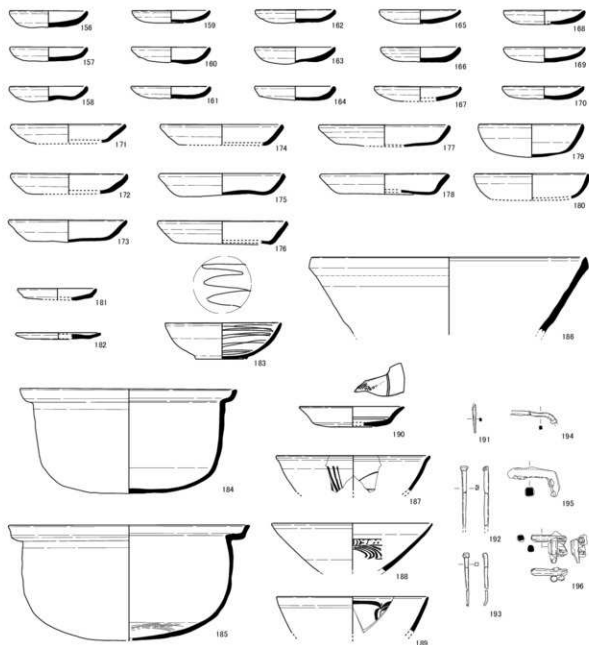


图32 出土遺物 实测图6 (1:4)

SK150



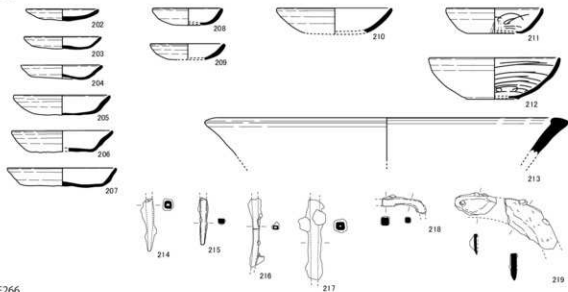
SK294



図33 出土遺物 実測図7 (1:4)

148は白色土器高環の脚部である。149は白磁碗である。150～153は鏡の鍔型である。154は土製品で内面が被熱しているが付着物がないため鍔型の類と推定される。155は石製品で楕円形をしており下部に叩く動作で生じた剝離痕がみられる。

SK38



SE266

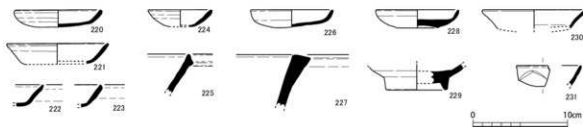


図34 出土遺物 実測図8(1:4)

SK150出土遺物 土師器皿・須恵器鉢・甕、瓦器碗・皿・鍋・羽釜、焼締陶器甕、白磁碗、青磁碗・皿、青白磁碗、黄軸褐色彩盤、釘、鎌、砥石、焼土などが出土した。

156～178は土師器皿Nである。156～170は口径8.3～8.8cm、171～173は口径12.3～12.6cm、174～178は口径13.1～14.0cmである。179・180は土師器皿Sである。179は口径11.2cmで被熱している。180は残存率が悪いが口径12.3cmである。181～183は瓦器で、181・182は皿で被熱により炭素がとんで色調が赤くなっている。183は碗で樟葉産である被熱している。184・185は鍋で被熱しており炭素がとんでいる。186は東播系須恵器の鉢である。187は白磁碗で外面に櫛描文、内面の模様は細片のため不明だが線刻がある。188は青白磁の碗で内面に印文がある。189・190は青磁である。189は碗で龍泉窯産、190は皿で所謂同安窯系である。191～196は釘と考えられる。191～193厚さ1mm程度の板を折り曲げて成形されている。194・195は残存状態が悪いが形状から鋸と考えられる。このほか埴土の可能性のある焼土298・299(図版23)が出土している。土師器の年代観は6B段階(1200～1230年)に該当する。

SK294出土遺物 SK150の下層で検出した土坑で土師器皿Nが出土した。197～199は口径8.8～9.4cm、200は口径12.8cm、201は口径13.3cmである。

SK38出土遺物 土師器皿N・S、須恵器甕、瓦器碗・杯・鍋・火鉢、焼締陶器甕、白磁碗、青磁碗、平瓦、釘、鎌、鋸などが出土した。202～207は土師器皿N、208～210は皿Sである。202

～204は口径7.8～8.7cm、205は口径10.4cm、206は10.8cm、207は11.6cmである。208は口径7.5cm、209は口径8.0cm、210は残存率が悪いが口径12.3cmである。211～213は瓦器である。211は杯で体部外面下部に輪花の刻みがある。212は椀でおそらく樟葉産である。213は火鉢である。214～217は鉄釘である。218は鋸か。219は鉄製の鎌である。6C段階（1230～1260年）

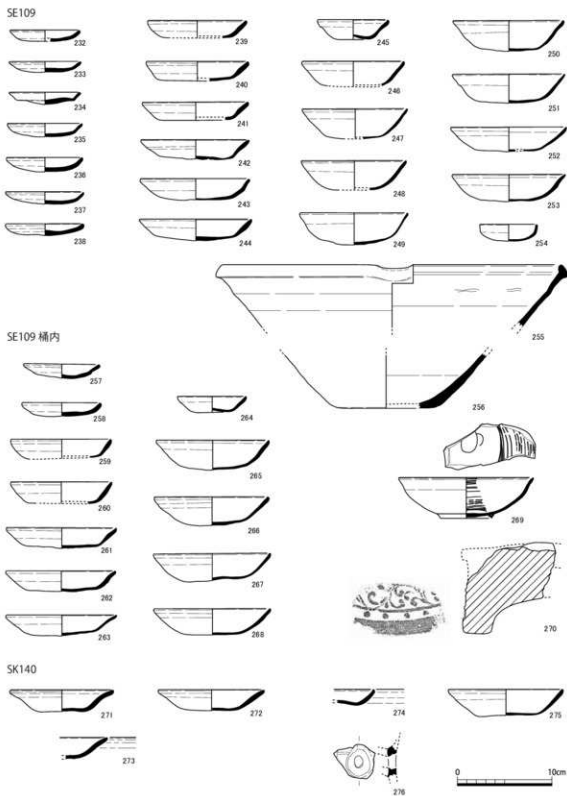


図35 出土遺物 実測図9（1：4）

の遺物と考えられる。

SE266出土遺物 土師器皿・鉢、須恵器鉢・甕、瓦器椀・杯・鍋・火鉢、青磁椀・皿、白磁椀・皿、青白磁椀、黄釉褐彩盤、常滑甕、平瓦などが出土した。220～223は土師器皿N、224は土師器皿Sである。225は東播系須恵器の鉢である。226は瓦器皿・227は瓦器火鉢である。228・229は白磁である。228は皿、229は椀である。230・231は青磁である。230は皿、231は蓮弁文の椀である。

SE109出土遺物 土師器皿、須恵器甕・壺、瓦器椀・鍋・火鉢、山茶椀、白磁椀・皿、青磁椀・皿、輸入陶磁器三彩細片、焼締陶器甕・鉢、軒平瓦、焼土などが出土した。

232～244は土師器皿Nである。232～238は口径7.4～8.3cm、239は口径10.6cm、240は口径10.9cm、241～244は口径11.3～12.0cmである。245～253は土師器皿Sである。245は口径7.8cm、246～253は口径10.9～12.3cmである。254は土師器のミニチュア鉢である。255・256は東播系須恵器の鉢である。257～263は桶内出土遺物である。257～263は土師器皿Nで257は口径8.2cm、258は口径8.5cm、259は口径10.7cm、260は10.8cm、261～263は口径11.7～11.8cmである。264～268は土師器皿Sで264は口径7.4cm、265～268は口径12.0～12.4cmである。269は瓦器椀、270は軒平瓦である。7C段階（1320～1350年）に位置付けられる。

SK140出土遺物 土師器皿271～275と輸入陶磁器の水注が出土した。271～273・275は土師器皿Sである。271は口径11.0cm、272は口径11.3cmである。完形で出土した。274は皿Nである。275は皿Sで口径12.2cm、271・272と比較して古い要素を持つ。下層にあった遺構の混入品と考えられる。276は輸入陶磁器水注の注口部破片で褐釉陶器である。271～273の年代観は15世紀後半である。

SD1出土遺物 土師器皿、瓦器灯明台、肥前磁器染付椀・皿、中国産白磁皿、中国産染付椀が出土した。SD1はこれらの遺物から江戸時代前期に埋められた溝であることがわかるが、ほかに中世の土器類を多量に含んでいた。特に15世紀代の遺物はSD1の下層から多く出土し、発掘中も意識的に掘り分けたが、最下層にも近世遺物は少量ながら含まれた。このため古いものの混入品も含め出土遺物についてはSD1としてまとめて報告する。

277は土師器皿Sである。口径12.0cmである。278は瓦器の灯明台である。279～281は肥前磁器で279は椀、280・281は皿である。282・283は輸入陶磁器で282は白磁皿・283は染付椀である。これらの遺物の年代観は17世紀の前半と考えられる。

この他SD1からは多量の中世の遺物が出土した。284～286は土師器皿Sである。15世紀後半の年代観をもつ。287は瓦器鍋、288は瀬戸美濃焼の天目椀、289は焼締陶器挿鉢で丹波産である。290・291は青磁椀、292は青磁香炉で外面に算木文をもつ。293～295はさらに古い時期の遺物の混入で13世紀後半の土師器皿Sである。296は有孔埴、297は鋳型である。297についてはSD1はSE200を切っているため混入と考えられる。

その他輸入陶磁器（図37） 今回の調査では包含層や新しい地層に混ざって輸入陶磁器の細片が多く出土した。集めた破片は319点である。内訳は9・10世紀の白磁2点（0.7%）、11・12世紀

SD1

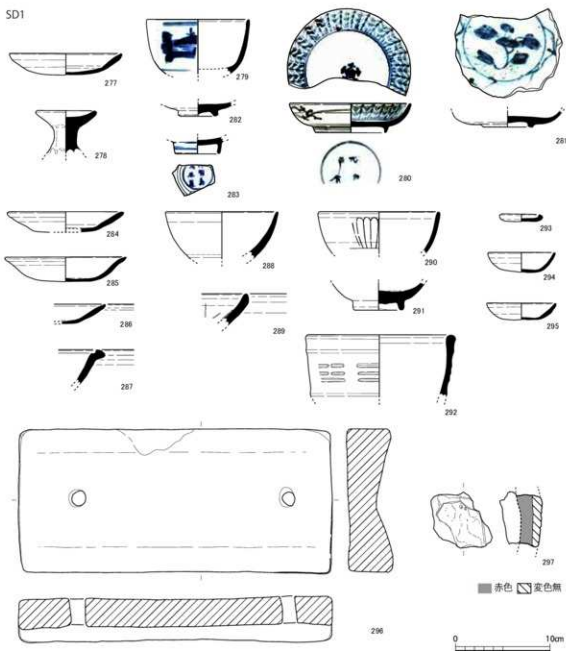


図36 出土遺物 実測図10(1:4)

前半の白磁30点(11.1%)、12世紀後半・13世紀の白磁48点(17.7%)、14世紀の白磁12点(4.4%)、白磁壺25点(9.2%) 13・14世紀の青磁113点(41.7%)、15・16世紀の青磁4点(1.5%)、青磁壺3点(1.1%)、青白磁14点(5.2%) 施釉陶器類20点(7.4%)、不明48点であった。

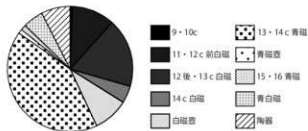


図37 出土輸入陶磁器の時期・器種別割合

IV まとめ

今回の調査地は平安京左京八条四坊二町跡に該当する。平安京内での位置は東南部であるが、現在の高倉通よりも東側の試掘調査では、これまで河川堆積層を確認するのみで平安京跡に関する遺構が検出されていないことを考えれば、実質上は京の東端にあたる土地であったと言える。豊臣秀吉が洛中を囲った御土居跡が今回計画地の東に隣接していることから、中世に至ってもなお鴨川との境界域であったと推測される。

今回の調査で確認できた最も古い遺構は平安時代前期の井戸である。この井戸が成立する遺構面の基盤となる地層は河川由来の砂礫層であり、その堆積状況から平安京遷都以前の当該地は島状の砂帯とそれに付随する窪地が分布する扇状地であったことがわかった。窪地の埋土からは7世紀代の須恵器が出土したことから、少なくともその頃までの当該地は河川敷の様相を呈していたと考えられる。

この空き地に確実に人の手がかかったと言えるのは平安時代前期で、今回の調査で検出された当該期の遺構はSE180、SP207のみであるが、北隣接地の調査①でも平安時代前期の井戸を検出していることから、平安時代前期には宅地としての活発な土地利用があったと推測される。SE180は9世紀後半には廃絶したが、続く10・11世紀は遺構・遺物とも希薄である。小穴から10・11世紀代の遺物が少数出土しているため、未活用になったわけではないものの活発な土地利用はなかったと言えよう。

再び当該地に活発な利用が起こるのは12世紀後半以降で、多数検出された柱穴・小穴の多くは、12世紀後半から13世紀代の遺構と考えられる。この成果は周辺の調査成果とも一致し、当該地を含む左京八条四坊の活発な利用が12世紀後半から13世紀にあったとも指摘できる。

文献上で確認出来る平安時代末期から鎌倉時代後期の八条四坊二・三町は、二町の西南隅（『鎌倉遺文』三〇九五号）と三町の西南角の土地が八条院領となっており、鎌倉時代後期には八条院町は一括して東寺に寄進されていることが知られる（『鎌倉遺文』二五〇六〇号）。今回の調査地を含む周辺調査で最も多くの遺構が検出される時期と左京八条四坊が八条院領であった時期が重なるのは必然と言え、京都駅北側の地域の土地利用を考える上で欠かせない成果を得ることができた。

また、今回の調査では13世紀代の遺構から鏡の鋳型が出土した。京都駅北側地域の調査では、八条院領に比定できるか否かに関わらず、鋳型などの鋳造関係資料が出土することが多い。鎌倉時代には金属加工関係の職人が居住する地域であったと考えられているが、東端といえる本町もまたその一端であったということがわかった。

13世紀以降は14世紀前半の遺構（SE109）までは確認できるが、14世紀後半から15世紀代の遺構はほとんど検出されなかった。

次に活発な土地利用が始まるのは15世紀後半からであるが、これよりも新しい遺構は調査地の西側で集中的に検出された。これは後述する江戸時代の東塩小路村境界の溝SD1を境にして西側に遺構が展開していた結果である。

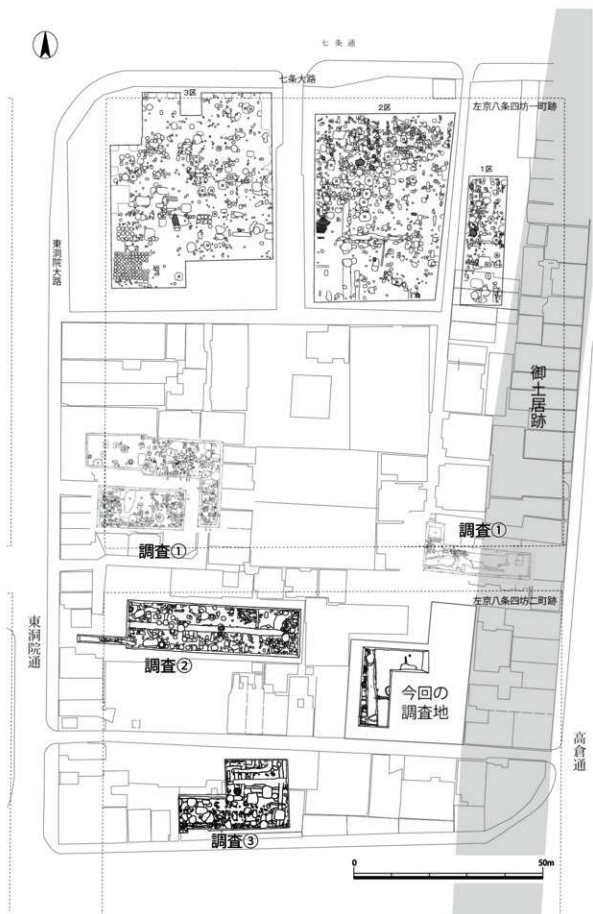


図38 平安京左京八条四坊一・二町跡内の発掘調査成果（中世後期から江戸時代）（1：1000）

SD1は調査区を南北に貫く長さ20m以上、幅約3m、深さ0.9mの溝で、江戸時代前期には埋められた。平・断面の観察から少なくとも2度の掘り直しが認められ、このことから維持作業が行われた重要な溝であったと推測できる。堀とも呼べる規模の大きさと18世紀の東塩小路村の推定復元図上(図39)にみる屋敷地と藪の境界線にほぼ一致する立地から江戸時代初頭の東塩小路村境界の溝と推定される。

東塩小路村は若山氏が江戸時代を通じて庄屋を務めた洛中の農村で、今回の調査地から西洞院通までの広範を村域としていた。若山氏が文献上で初めて確認されるのは16世紀初頭の文書である。八条院領が東寺に寄進されて以後は東寺の曼荼羅院領であったようで、「若山家文書」(高橋一男氏所蔵)には下記のように伝わる。

「曼荼羅院領八条坊門敷地の事、若山陳客致さず、奉行も相定めざるの条、度々之を相触ると雖も、無音の上は理支に叶わざる者歟。所詮開作田地に於ては、当院として之を検知せしめ土貢を相定め、寺納を専らにせらるべし。若山承引能わざれば召し放ち、彼の下地は別人に申し付けらるべきの由、仰せらるる者なり。仍て執違件の如し。

永正十五年九月二十一日(齋藤)時基(花押) 基雄(花押)

この文書から若山家は永正十五年(1518)には当該地の開発を行っていたことが推測されその居城として「塩小路若山城跡」の範囲が推定されていた。若山家文書にはこの後も慶長十八年(1613)や元和八年(1622)年の書状が残り、都市近郊の農村としての重要性が伺える。なお、幕末には『若山要助日記』と呼ばれる仔細な日記が残る。

東塩小路村の前身である塩小路若山城跡は、これまでの調査では、その痕跡が確認されず所在も含め不明確であった。

今回調査の1区は北辺が東西に長いL字形で、調査範囲としてはSD1を中心として東側が広い。しかしながら14世紀後半より新しい遺構は東側ではほとんど検出されなかった。この範囲は江戸時代の絵図上は御運上納藪として空閑地とされていた範囲である。鎌倉時代の遺構は東側にも密に展開し、SD1を検出した面(第1面)の東側でも1基だが明治の土坑が検出されたことから、東側の新しい時代の遺構のみが著しい削平を受けた可能性は低く、遺構分布の差は土地利用の違いを反映している可能性が高い。

SD1は江戸時代の村の東境界と推定されるが、15・16世紀代の遺構がSD1を境に西側に集中して展開する状況やSD1の埋土から多量の中世遺物が出土したことを考え併せると、江戸時代以前の区画を踏襲している可能性があり、調査地の西端から東洞院通にかけての範囲が塩小路若山城跡の居住域である可能性が生じた。この成果は塩小路若山城跡に関する初めての調査成果といえよう。

以上今回の調査では、平安時代前期に開発があった後、平安時代後期まで空白期があり、平安時代末から鎌倉時代にかけて遺跡の活発な利用があったことがわかった。また、周辺ではじめて塩小路若山城跡を考察する手がかりを得た。

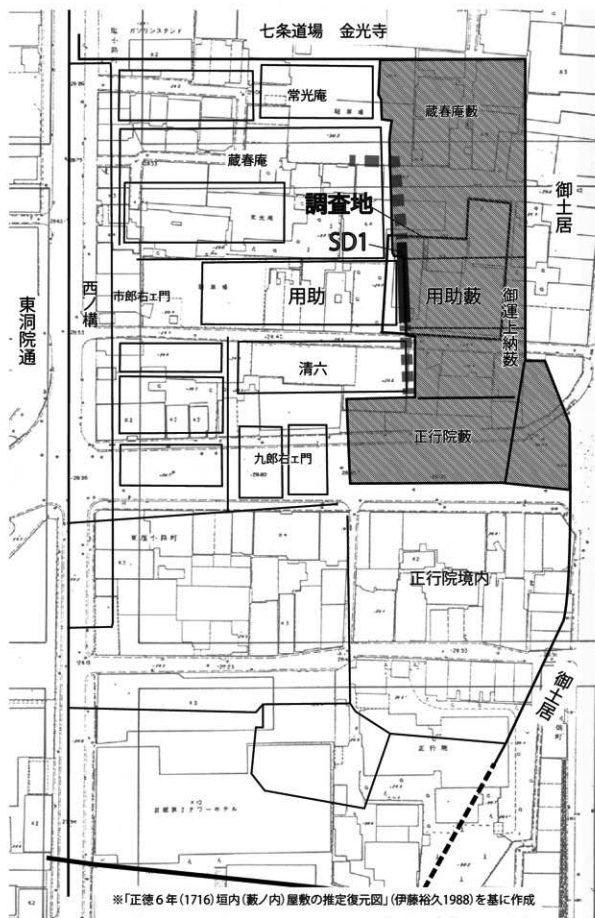


図39 江戸時代の東塩小路村の屋敷配置図(伊藤1988を基に作成)

試掘調査成果も含めた当該地における調査では、40mにも満たない範囲で遺構分布の東西差を確認できたが、これは都市の端、河川域との境界に位置するためと考えられ、平安京の全体像にとっても重要な成果を得ることが出来た。なお東隣接地は御土居跡に該当し、調査①でも御土居跡範囲には遺構があまり展開しない。やはり八条四坊二町域は事実上の平安京東端と言えるだろう。

引用・参考文献

財団法人古代学協会・古代学研究所編1994『平安京提要』

京都市1981『史料 京都の歴史 第12巻 下京区』平凡社

伊藤裕久1988「洛中農村の居住形態に関する復原的考察」下山城京廻東塩小路村における「構」集落の空間構造『日本建築学会計画系論文報告書 第387号』一般社団法人日本建築学会

京都市歴史資料館1997『叢書 京都の史料1 若山要助日記 上』

京都市歴史資料館1998『叢書 京都の史料2 若山要助日記 下』

図 版



1 SD1 全景 (南から)

図版2 遺構



1 調査地から京都タワーをのぞむ（東から）



2 1区第3面 井戸検出状況（北から）



1 出土鑄造関係遺物

図版4 遺構



1 1区第3面 全景および自然堆積層の分布 (画面下が北)



2 1区 自然堆積層の堆積状況 (攪乱断面 東から)



1 1区第3面 全景（北西から）



2 SE180 遺物出土状況（北西から）

図版6 遺構



1 SE180 断面 (東から)



2 SE180 下段井戸枠検出状況 (東から)

図版7 遺構



1 SE180 井戸枠検出
状況（東から）



2 SE180
井戸枠取り上げ状況



3 SE180
井戸枠の木組み

図版8 遺構



1 SE180・SE265 検出状況（南東から）



2 SE265 井戸枠内完掘状況（南から）

図版9 遺構



1 SE265 上部断面
(南から)



2 SE265 掘方断面
(南から)



3 SE265
井戸枠近接
(南から)

図版10 遺構



1 1区第2面 全景（北西から）



2 SE156・SE266 切り合い状況（北から）



1 SE156 掘方断面 (西から)



2 SE156 井戸枠検出状況 (南から)



3 SE156 井戸枠近接 (西から)

図版12 遺構



1 SK150 断面 (南から)

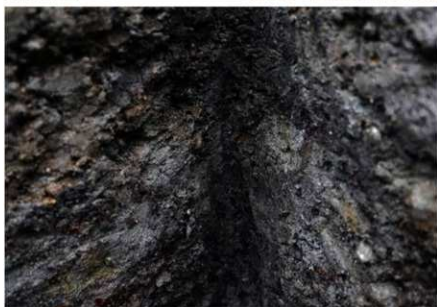


2 SK150 底部炭検出状況 (南から)

- 1 SK150 掘削中の石
出土状況 (南から)



- 2 SK150 角柱痕跡
(南西から)



- 3 SK140 断面
(南東から)



図版14 遺構



1 SE266 井戸枠内断面 (東から)



2 SE266 掘方断面 (東から)

図版15 遺構



1 SE266 内枠掘方断面（東から）



2 SE266 掘方断面南（東から）



3 SE266 掘方断面北（東から）



1 1区第2面 全景西半（北から）



1 SE109 井戸枠検出状況 (南東から)



2 SE109 断面 (東から)



1 SK2 断面 (東から)



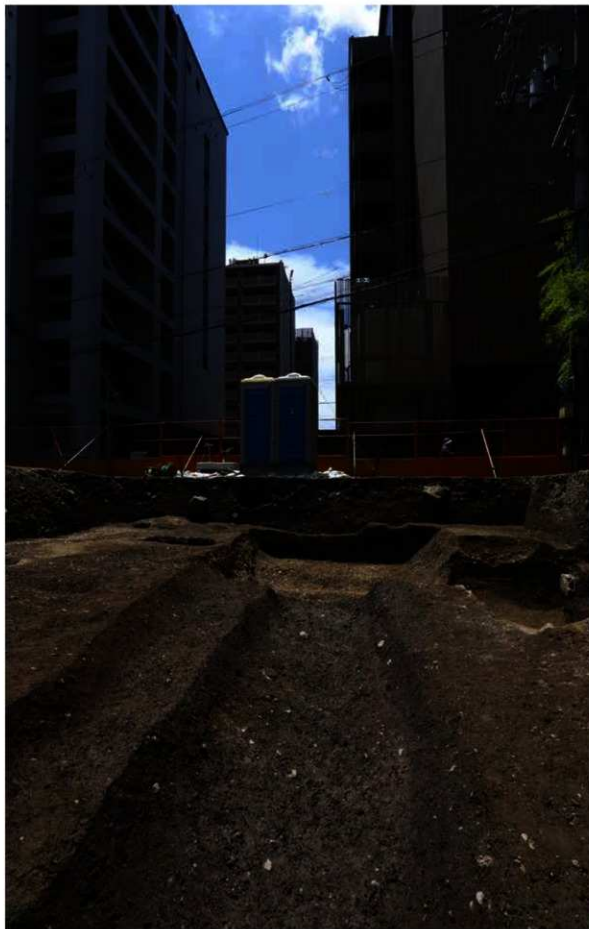
2 SK2 石検出状況 (東から)



1 1区第1面 検出状況（南から）



2 1区第1面 全景（西面下が北）



1 SD1Aと1B・Cの切り合い（北から）



1 SD1断面（北から）



2 2区第2面 全景（北西から）



自然堆積層み・第1面掘り下げ・SE180・SE265 出土遺物







262



263



264



265



266



267



271



272



296

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうしほうにちょうあと・しおこうじわかやまじょうあと							
書名	平安京左京八条四坊二町跡・塩小路若山城跡							
シリーズ名	京都市文化財保護課発掘調査報告							
シリーズ番号	2022-1							
編著者名	赤松 佳奈							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御土上上本能寺前町488							
発行所	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
発行年月日	西暦2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 はちじょうしほうにちじょう 八条四坊二町跡・ しおこうじわかやまじょう 塩小路若山城跡	へいあんきょうさきょう 京都市下京区 むかしののちのちまてがけのまにまへ 東御院通り七条 さがるのちのちまてがけのまにまへ 下る東塩小路町 556番10	26100	1 722	34度 59分 15秒	135度 45分 43秒	2022年5月 17日～2022 年7月16日	260㎡	商業施設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京左京 八条四坊二町跡 ・ 塩小路若山城跡	都城跡 平城跡	平安時代 ～ 近世	掘立柱建物、溝、 井戸、土坑		土師器、須恵器、陶磁器、 軒平瓦、鈿型		平安時代前期の井戸 を検出した。 東塩小路村の東境界 の溝を検出した。	

京都市文化財保護課発掘調査報告2022-1

平安京左京八条四坊二町跡・塩小路若山城跡

発行日 2023年3月31日

発行 京都市文化市民局

編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

住所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488

TEL：(075) -222-3130

印刷 株式会社あおぞら印刷

TEL：(075) -813-3350

